

岐阜県文化財保護センター

研 究 紀 要

第 8 号

2 0 2 4

岐阜県文化財保護センター

目 次

岐阜県における古代・中世寺院の立地と変遷	小野木学 1
大名による寺院の移転とその意義について	櫛田尚人 25

岐阜県における古代・中世寺院の立地と変遷

小野木 学

はじめに

岐阜県では平成30年度から令和4年度までの5年間で「岐阜県古代・中世寺院跡総合調査」(以下、「総合調査」と記す。)を実施し、令和4年度末に報告書を刊行した(岐阜県文化財保護センター2023、以下、本文中の引用文献は「岐阜県文化財保護センター」を「県文財セ」、「市(町村)教育委員会」を「市(町村)教委」と記す。)。総合調査では、岐阜県文化財保護センターの職員が現地調査や整理等作業、報告書作成を実施し¹⁾、県内3,464か寺の現地確認を行い、1,918か寺の古代・中世寺院跡を見出し、現地で平場²⁾を確認した寺院跡(以下、遺跡名以外は「寺院」と記す。)のうち127か所の地形観察図を作成した。また、その総括では寺院の成立時期、立地、空間構造、宗派等の検討を詳細に行い、大きな成果を得た。しかし、寺院の成立年代等は「各自治体史等の文献資料、発掘調査・遺跡詳細分布調査資料(発掘調査報告書等)に加えて、各地域・関係社寺に残る口承・伝承等を含めて集計」(県文財セ2023)しており、同報告書の各論で上川通夫氏が指摘しているように(上川2023)、文献史料と考古学的事実との整合的な理解が困難な寺院への対応が一つの課題として残った。

上川氏のいう考古学的事実とは、考古学的手法によって明らかとなった遺構・遺物等に関する事実である。かつて藤澤一夫氏は、『日本考古学講座』において、寺院の遺構を対象とする調査には発掘観察と表面観察による現状調査があるとし(藤澤1956)、文化庁文化財部記念物課が監修した『発掘調査のてびき』の「寺院の調査」でも、遺跡情報の事前収集項目として、最初に地表観察が挙げられている(文化庁文化財部記念物課監修2013)。

そのため、小稿では岐阜県で詳細分布調査や発掘調査が実施された主な古代・中世の寺院を対象とし、その立地と平場の配置を再検討した上で、それらの調査から推定できる寺院の存続年代等を整理する。そして、総合調査において文献資料等から得られた成果を含めて、県内における古代・中世寺院の変遷について検討したい。

1 岐阜県内の山麓・山腹に立地する主な寺院

岐阜県における寺院の創建は7世紀中頃から後半に始まり(井川1994、早川2003)、その頃の寺院の多くは平地に位置する。その後、山腹等での造営が増加していくが、具体的に岐阜県内における寺院の成立時期や立地の詳細に関する検討は牛丸岳彦氏や大下永氏などの論考(牛丸2011、大下2018)の他には、それほど多くはない。

一方、上原真人氏は「少なくとも畿内では、すでに7世紀代に、僧寺と尼寺、平地寺院と山林寺院というネットワークが形成されていた可能性が高い」(上原2002)とし、伯耆や三河でも畿内と同様の事例が確認できることから、その地域を「少なくとも畿内およびその周辺」とし(上原・梶川2007)、「平地寺院と山林寺院とがセットで機能するという情報が、7世紀後半に各地に伝播した」(上原2011)と推定した。このように、畿内を中心に寺院創建初期の段階から地方でも山林寺院の存在

が指摘され、畿内周辺に位置する岐阜県においても同様の状況であった可能性が考えられた。

なお、山林寺院とは、その名称を提唱された斎藤忠氏は「僧侶などが山林修行を目的として、建立した寺院」とし、「山麓、山間、山の腰、山頂付近などで、その周辺に叢林があつて静寂な境地に立地しており、又その寺の寺域、建物も、その地勢に順応して定められて建立された寺」と定義付けられた（斎藤1996）。修行本位かどうかの判断は難しい場合があるものの（梶川2007）、小節では氏の定義に従い、山麓や山腹、山頂付近などに立地する寺院を対象とし、そのうち、詳細分布調査や発掘調査が実施された主な寺院について紹介したい³⁾。なお、寺院が立地する地形は山麓等（山麓、丘陵、尾根の先端付近等）、山腹等（山の中腹、尾根・山頂付近の鞍部等）、山麓から山腹等の3つに分けて記載する。

(I) 山麓等に立地する寺院

①正家庵寺跡（恵那市）（図1）

正家庵寺跡は北東から南西方向に連なる山塊の麓の河岸段丘上に位置する。段丘下の現集落と金堂跡との比高差は約30 m、斜距離は約300 mである。昭和51～55年度、平成4～11・25～29年度に発掘調査が実施され、東西110 m、南北70 mの寺域⁴⁾を有し、主要伽藍を法隆寺式に配置する古代寺院であることが判明した（恵那市教委2000・2018）。築地で囲まれた寺域は伽藍地と東区に分かれ、金堂、塔、講堂、回廊は同一の主軸方位で建てられており、座標化に対して6度傾いている。また、8世紀中頃には金堂基壇等が完成し、9世紀後半の主要伽藍の火災を契機として10世紀前半頃には廃絶したことが判明した。正家庵寺は定型化した伽藍配置を有するが、北下がりの地形上に位置しているため、伽藍の正面は集落域とは反対方向を向き、地形的には高所を正面に見据えていることが特徴である。

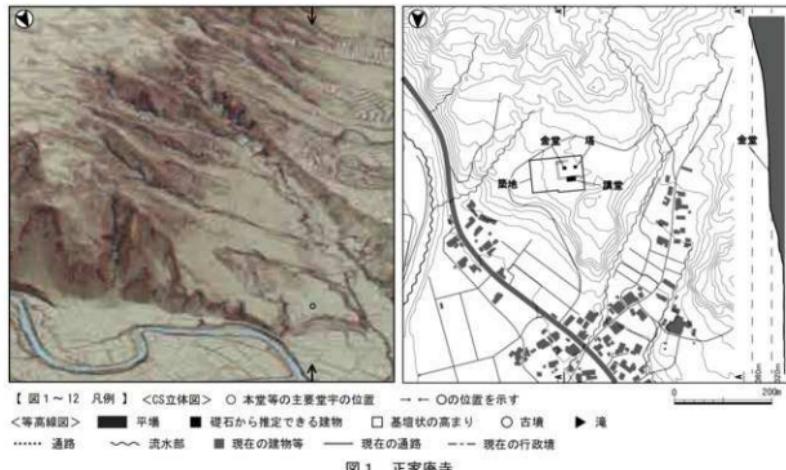


図1 正家庵寺

②日焼遺跡（高山市）（図2）

標高 821 m の三枝山の南麓に所在し、山麓の現集落と仏堂（SB04）との比高差は約 20 m、斜距離は約 140 m である。仏堂（SB04）が位置する場所は南北約 100 m の緩斜面の最奥であり、平成 27・28 年度に実施された発掘調査の結果、SB04 は 5 × 3 間の礎石建物で須弥壇内部の土坑から八稜鏡が出土した（県文財セ 2021）。SB04 周辺の出土遺物としては灰釉陶器の碗・皿・多口瓶、ロクロ土師器碗・皿、螺髮、塑像片、硯、瓦、釘類、筒状銅製品などがある。建物の主軸方位は真北であり、出土遺物から 10 世紀後半の建物と考えられている。また、SB04 と同時期の建物として SB07・08 があり、いずれも SB04 よりも約 3 ~ 5 m 低い標高で検出されている。一方、SB05・06・09 は 10 世紀前半の掘立柱建物で、SB09 は仏堂と考えられ、これらの主軸方位は真北からずれている。なお、同遺跡からは 8 世紀後葉の多口瓶や鉄鉢型土器が出土していることから奈良時代に何等かの信仰利用があったと考えられるが、9 世紀代の建物等は未確認であり、10 世紀の仏堂形成までは連続しないようである。

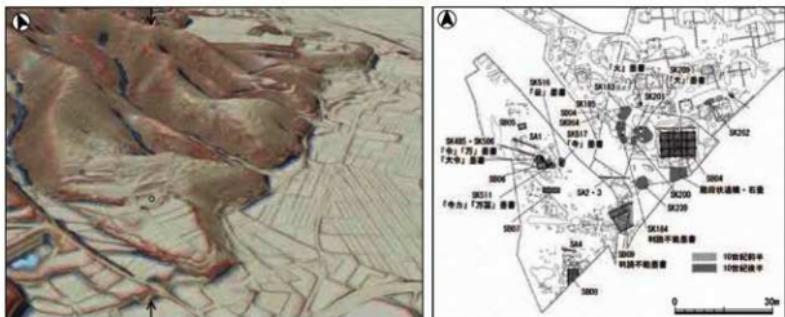


図2 日焼遺跡（道標図は県文財セ 2021 を引用）

③寺屋敷遺跡（揖斐郡揖斐川町）（図3）

揖斐川本流と磯谷の合流地点に突き出た尾根の先端に位置し、山麓と礎石建物跡との比高差は約 15 ~ 20 m である。平成 5 ~ 7 年度に実施された発掘調査の結果、尾根を段切りした平場上に 3 × 4 間の礎石建物が検出され、灰釉陶器の碗・皿や多口瓶、螺髮、釘類が出土した（県文財セ 2001）。建物の主軸方位は真北ではなく尾根筋に沿う方向であり、出土遺物から 10 世紀から 11 世紀前半頃に機能していたと考えられる。また、寺屋敷遺跡の南側には磯谷口遺跡があり、寺屋敷遺跡と同時期の灰釉陶器とともに緑釉陶器片 2 点と黒色土器片 4 点が出土している。このように、寺屋敷遺跡の建物は尾根の先端に位

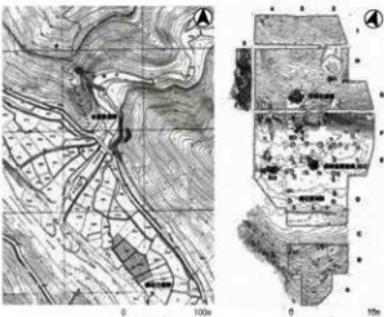


図3 寺屋敷遺跡（県文財セ 2001 の図を引用）

置する小規模な単独の仏堂で、その麓には寺屋敷の仏堂に間与するような人々が住んでいた可能性が指摘でき、富永樹之氏は村落内寺院の一例としている（富永 2006）。

④柏尾廃寺跡、光堂寺廃寺跡、竜泉寺廃寺跡（養老郡養老町）（図 4）

南北に延びる養老山地の東山麓に位置し、南から北に向かって柏尾廃寺跡、光堂寺廃寺跡、竜泉寺廃寺跡がある。柏尾廃寺は柏尾谷と勢至南谷の間、光堂寺廃寺は勢至南谷と勢至北谷の間、竜泉寺廃寺は行平谷と威徳谷の間に位置し、いずれも谷川に挟まれた緩斜面上に平場が展開し、背面の山腹に窟や滝、墓域等が認められる。また、山麓に沿って近世伊勢街道が通過しており、現状では、街道からそれぞれの寺院まで直線的な通路（参道）が延びている。なお、寺伝や近世の記録では、いずれの寺院も天平年間（729～749）に建立され、永祿 5（1562）年に兵火により焼失したとされている。また、いずれの寺院も法相宗から天台宗に改宗している。

柏尾廃寺は、緩斜面の最奥に現状で5×3間以上の東面する建物の礎石が残り、ここが主要堂宇跡と考えられる。その北側には一辺約4.5mの石列を伴う基壇跡があり、昭和14年の調査では関市日龍峰寺の多宝塔（鎌倉時代）の礎石の配置と同一であることが指摘されている（小川 1939）。主要堂宇跡の東面には現集落から直線的な通路が延び、その両側には通路に直交する方向に複数の細長い平場が展開する。平場は現存德寺付近まで確認でき、東西方向に延びる2条の通路によって約100m幅で3列に区切られる。一方、主要堂宇跡の背面の山腹には墓域が展開し、多数の石塔が散在している。石塔の多くは「千体仏」（図4-写真左上）と呼称される場所に集められており、そこでは複数の石塔未成品が確認できる（小野木 2019a）。また、墓域の北西側の谷筋には奥行2～3mの窟があり、窟の上方の尾根筋には集石が認められ、集石からは経筒片が採集されている⁵⁾。なお、窟の西側の谷筋を登ると小規模な平場が3段確認でき、そこでは鉄滓が採集でき、さらに登ると切り立った砂岩の露頭があり（図4-写真右上）、そこには砂岩の剥片が堆積している。

光堂寺廃寺には緩斜面の最奥に日吉神社が位置し、そこに複数の礎石が残る平場があることから、ここが光堂寺廃寺の主要堂宇の一つであったと考えられる。日吉神社の西側から北側の山腹には巨岩や窟（図4-写真左下）、墓域があり、窟は幅約5m、奥行約4mで、その内部には四方梵字を刻む一石五輪塔（若しくは二石五輪塔）や宝鏡印塔の部材が確認できる。また、墓域では集石や石塔が散見でき、過去に古瀬戸瓶子が出土している。日吉神社から勢至南谷までの区域はやや傾斜が強くなるが、柏尾廃寺跡と同様に細長い平場が階段状に広がり、石仏等が散在している。そこには從来から複数の古墳の存在が知られており、平場造成の際にも古墳の墳丘を削平せずに残しているようである。その最奥の山腹は急傾斜ながら複数の平場が確認され、中世陶器が採集されている。さらに、その北側の谷筋には高さ約2～5mの段差が複数の箇所で認められ、滝として景観が備わっている（図4-写真右下）。一方、山麓の伊勢街道から光堂寺廃寺跡に至る辻には16世紀の文献史料が残る「勢至鉄座之址」があり、現在でも多数の鉄滓が採集できる。なお、応永27（1420）年の「土岐善弘書状案」には光堂寺廃寺の寺地が記されており、その西端である一瀬山之峯は養老山地頂上の尾根付近と推定されている（養老町教委 2007）。このように、光堂寺廃寺では寺院地が山麓に展開しつつも、寺地は山全体に及んでいることが文献から推定できる。

竜泉寺廃寺は、緩斜面の最奥に複数の礎石が確認されており、ここが主要堂宇跡と考えられる。その前面には「堂の庭」と呼ばれる広い平場をはじめとして、階段状に造成された大小60以上の平場

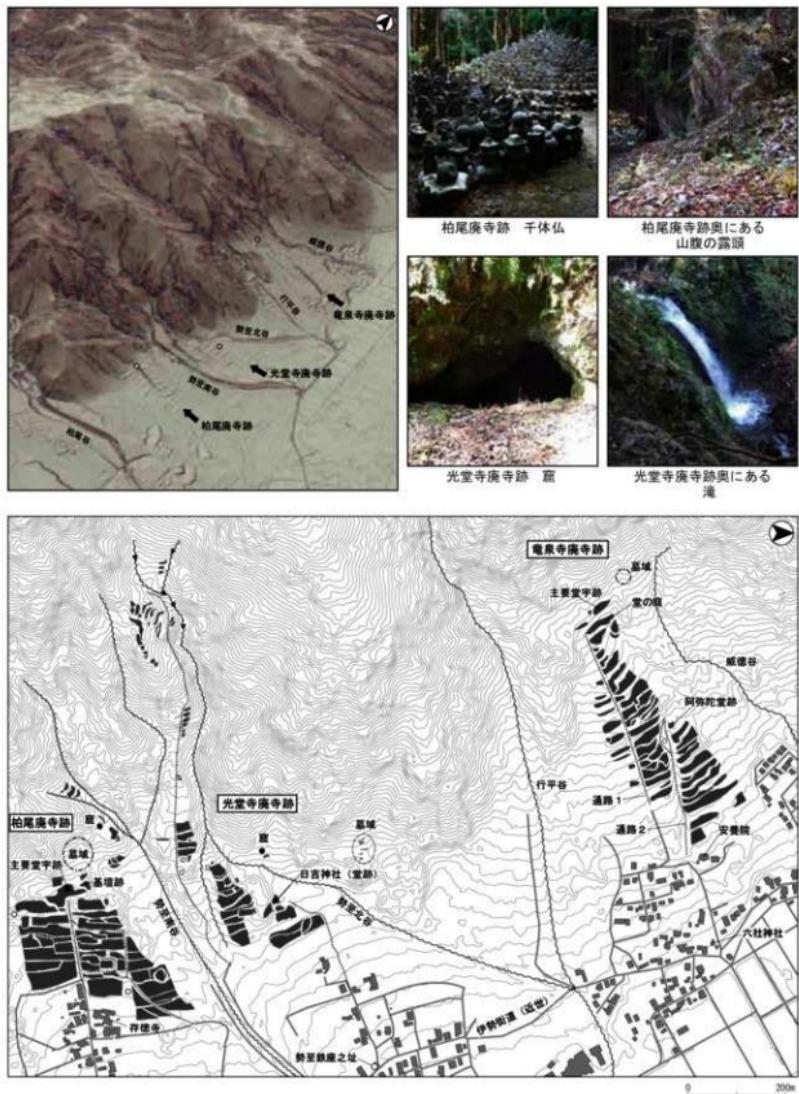


図4 柏尾庵寺跡・光堂寺庵寺跡・龍泉寺庵寺跡

が残る。この中央には東西約 360 m にわたる直線通路（通路 1）が延び、さらにその北側には谷地形を利用した通路（通路 2）があり、平場群を北側・中央・南側の 3 区域に分けている（養老町教委 2016）。通路 1 は「堂の庭」に至るまで南北両側に多くの平坦面があるものの、明確な出入口を認めることができないことから、この通路は「堂の庭」に至ることを主目的としていた可能性が指摘されている。一方、通路 2 は北側の平場の最奥に位置する「阿弥陀堂跡」に至る道であり、阿弥陀堂より下位にある平場群にアクセスできる出入口を各所で確認できる。なお、通路 2 は伊勢街道沿いの六社神社のある辻から竜泉寺廃寺跡に至る現道の延長に位置することから、竜泉寺廃寺には創建当初から伊勢街道付近まで通路が延びていた可能性が指摘できる。

さて、いずれの寺院でも遺跡詳細分布調査が実施され、寺院の存続時期が推定されている（養老町 2007・2016）。柏尾廃寺は本堂跡若しくはその北側で 8 世紀から 11 世紀後半までの遺物が採集されており、この頃には「山林修行場を思わせる場所をもっていた」とされている。そして、11 世紀末から 12 世紀後半の遺物分布域が拡大し、12 世紀末から 13 世紀前半の遺物量が多くなり、16 世紀後半以降の遺物は寺域の中心部では採集されていない。一方、光堂寺廃寺と竜泉寺廃寺は古代には機能しておらず、その始まりは 12 世紀初頭から後半であり、16 世紀後半に衰退するとされている。そのうち、竜泉寺廃寺跡の直線通路（通路 1）は、13 世紀末から 14 世紀前半頃に整備された可能性が高いとされている。

（2）山腹等に立地する寺院

①光寿庵跡・石橋廃寺（高山市）（図 5）

光寿庵跡は山腹の谷奥に、石橋廃寺は山麓に位置する。光寿庵跡と山麓の集落域との比高差は約 120 m、斜距離は約 430 m であり、光寿庵跡と石橋廃寺跡との比高差は約 120 m、斜距離は約 700 m である。光寿庵と石橋廃寺の成立年代に関する記録はないが、光寿庵は室町時代以降に地域の武将である広瀬氏の菩提寺であったという伝承があり、長野県大滝村資料館所蔵の鰐口には「飛州広瀬向上庵地藏堂永享八年八月二四日」の銘文が残るように、15 世紀代までは存続していたようである。

光寿庵跡には山腹の谷部の最奥に広い平場があり、その中央付近には石列を伴う基壇が確認できることから、ここが主要堂宇跡と考えられる。その背面には湧水点から導水される池があり、前面にも広い平場が確認できるものの、平場に至る通路が虎口状に屈折するなど後世の改変が認められる。また、本堂から南へ約 80 m の高台には一辺約 6 m の方形の基壇状の高まりが確認でき、その中央には石塔が据えられ、平場の周囲には土塁と溝が巡る。光寿庵跡では 7 世紀後葉の須恵器や古代瓦が昭和初期に採集されており、古代瓦には人物を描いた戯画瓦もある（国府町史刊行委員会 2011）。

石橋廃寺は昭和 60・61 年度に発掘調査が実施され、礎石建物が検出された（国府町教委 2005）。その出土遺物には円面鏡や暗文土師器、複数の古代瓦などがあり、特に平瓦に線刻された人物戯画や鳥描戯画、花卉文などが注目できる。さらに、光寿庵跡と同范の瓦が出土しており、人物戯画瓦の存在も共通している。石橋廃寺の出土遺物の時期は 7 世紀後葉～10 世紀であり、特に 7 世紀末～8 世紀にかけては暗文土師器や新羅系軒丸瓦、重圓文軒丸瓦などの出土から近畿の文化内容が色濃く反映されていると推定されている⁶⁾。このように、光寿庵跡と石橋廃寺跡は同范瓦の存在から同時期に存在していた可能性が高く、少なくとも 8 世紀以前において山麓と山腹に対置した宗教施設として機能していたと考えられる⁷⁾。

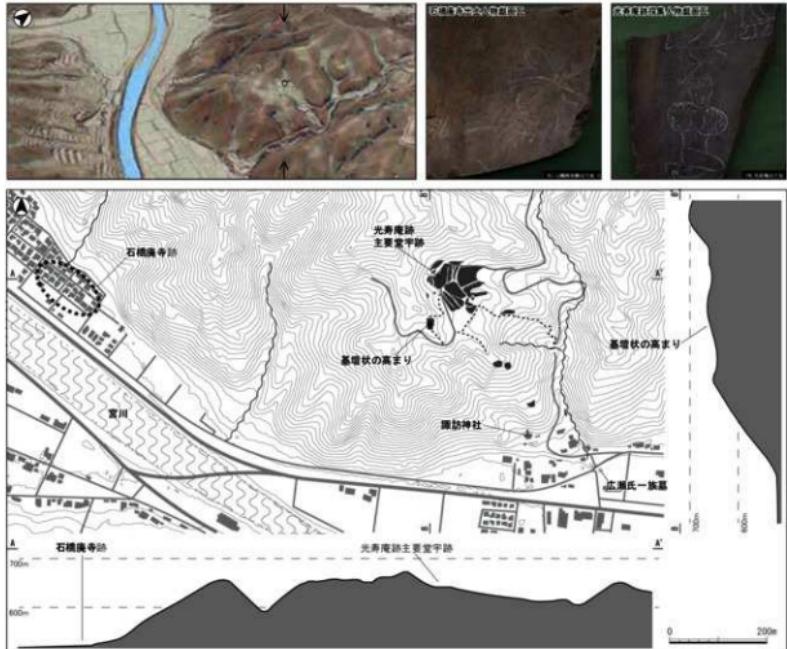


図5 光寿庵跡・石橋廃寺跡（右上の2枚の写真は高山市教育委員会提供）

②横蔵寺旧境内（揖斐郡揖斐川町）（図6）

山頂から延びる尾根の鞍部に位置する天台宗の寺院であり、山麓の集落域と旧境内本堂跡との比高差約260m、斜距離約650mを測る。横蔵寺縁起では延暦22（803）年に、この地に草堂を建てたとされ（坂本1982）、永禄8（1565）年に織田信長が寺領を没収したため伽藍が荒廃し、寛永元（1624）年に古堂の閉鎖と山麓への仮堂設置が行われたとされる。

本堂跡とされる場所は谷の最奥に位置し、基壇上に5×5間の礎石建物を有し、その右手に池が残る。さらに右手前の高位の平場には塔跡と考えられている礎石を有する基壇が確認でき、本堂跡から池と塔が一望できる景観であったと考えられる。また、谷の左手前には仁王門とされる3×2間に配置された礎石群があり、そこから等高線に沿って延びる通路の両側には、等高線に沿うような細長い平場が展開している。本堂横の池の周囲では湧水が認められ、本堂跡の背面には巨石の露頭がある。また、墓域は集石を伴い、本堂から丸山を挟んだ西側の尾根に位置する。なお、本堂跡の礎石建物の方位は地形に沿っており、本堂正面の斜面や仁王門から本堂跡に至る通路沿いには石積みが確認できる。

横蔵寺旧境内では詳細分布調査がなされ、灰釉陶器や中世陶磁器が採集されている（県文財セ2023）。灰釉陶器は本堂跡において1点のみが採集され、その型式は黒窯90号窯式（9世紀後半）⁸³⁾

である。一方、中世の陶磁器は多く採集され、特に山茶碗第5型式（12世紀後半～13世紀前半）以後の遺物が多い。灰釉陶器の採集は1点のみであるが、現在の横蔵寺には奈良時代末から平安時代初頭の作と考えられる銅造薬師如来立像が残され（清水1990）、横蔵寺縁起による成立年代も加味し、現時点では、横蔵寺旧境内には9世紀後半頃に本堂跡を中心とする範囲に小規模な仏堂等が存在していたと考えたい⁹⁾。そして、採集遺物が多数ある12世紀後半から13世紀前半頃に本堂跡を中心とする谷部において寺院地が整備されたと考える。また、報告された採集遺物のうち最も新しい遺物は山茶碗第8型式（13世紀後半から14世紀前半）であるが、現地に現存する石塔には扁平化した組合せ五輪塔の部材や一石五輪塔など16世紀後半に位置付けられる（小野木2019b）ものも散見される。

なお、横蔵寺旧境内から尾根伝いに約4300m南東に進むと、華厳寺に到達する。華厳寺は平地から延びる谷の最奥に位置し、延喜年間（901～923）に額を与えられた定額寺に列する寺院であり（菱田2023）、平安時代の早い時期の作とされる毘沙門天立像が残る（清水1990）。発掘調査等は実施されていないものの、文献や有形文化財の存在から平安時代には機能していた可能性が指摘できる。そして、地元では華厳寺を「谷の寺」、横蔵寺を「山の寺」と呼称しているように、両寺は現在でも平地と山地にある一連の寺院として認識されていることから、過去にも尾根筋を利用した往来があった可能性がある。

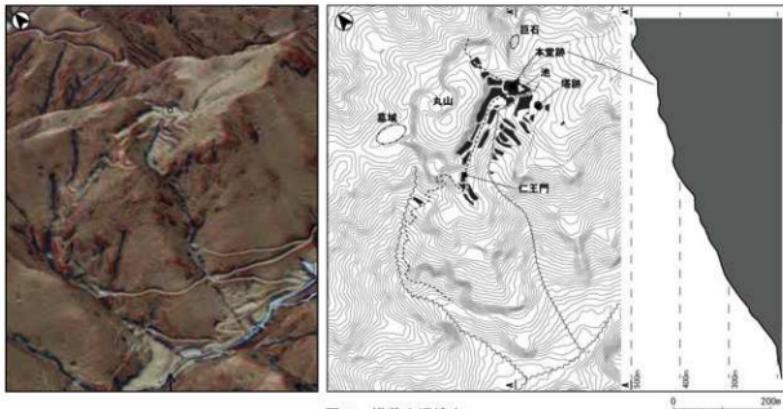


図6 横蔵寺旧境内

③白雲山観音堂（都上市）（図7）

標高471mの白雲山山頂から南へ延びる尾根の鞍部に位置し、山麓の集落域と本堂跡との比高差約130m、斜距離約310mである。昭和48年と平成5・6年に発掘調査が実施され、礎石建物や中世墓が検出されている（名古屋大学考古学研究室編1974、大和町教委1994）。

発掘調査では、最も高所にある広い平場からは建物等の遺構が検出されず、その一段下位の東端の平場にて5×5間の礎石建物が検出され、礎石下の炭化材の年代測定結果（AD1240年±90年）から鎌倉時代以降の建物と推定された。建物の主軸方位は真北ではなく、平場の長軸に沿う方向である。また、この平場からは中世陶器とともに10世紀代の灰釉陶器が複数出土している。一方、最高所の

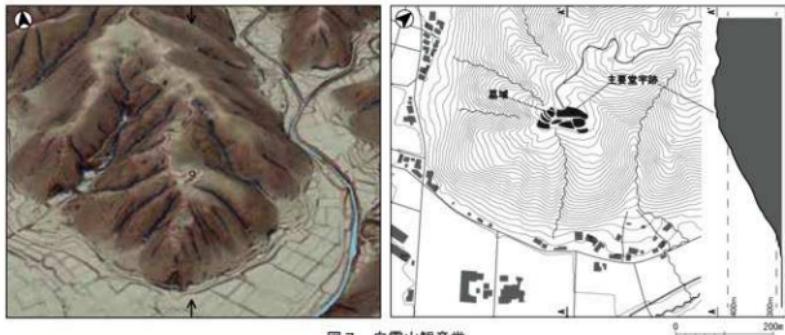


図7 白雲山観音堂

平場からは懸仏の御正体である聖觀音の金銅仏（座高9cm）が出土しており、他にも天保14（1843）年に山上で懸仏が採集されている（佐藤編2019）ことから、この平場に主要堂宇があったと推定したい。なお、最高所の平場の西端では、中世後期の石塔や集石遺構、蔵骨器などが検出され、墓域を形成していることが判明した。墓域の出土遺物は古瀬戸前II期から後I・II期（13世紀前半から15世紀前半）までの壺・瓶類や美濃須衛水注（藤澤2001）などとともに、一字の「福」の字を陽刻した高さ4.2cmの銅製印もある。このように、発掘調査の結果、本寺院では10世紀代に何等かの規模な宗教施設があり、13世紀頃には主要堂宇が創建され、15世紀代には衰退したと考えられる。

④大威德寺跡（下呂市）（図8）

標高約1,400mの拝殿山から南西に延びる尾根の先端付近の、旧益田郡と恵那郡の境に位置する天台宗の寺院である。文政12(1829)年に校訂、淨書された『飛州志』に引用された『濃州長瀧寺阿妙院所在経文末書』から推定される大威德寺の寺地は南北約6km、東西約5kmと推定され（下呂市教委2007）、その中央に位置する御厩野集落と本堂跡との比高差は約190m、斜距離約940mを測る。『飛州志』などによると、本寺院は源頼朝発願で文覚上人創建の伝承をもち、弘治2（1556）年の威徳寺合戦で堂塔の多くを焼失し、天文13（1585）年の飛騨大地震で壊滅したと伝えられている。

本寺院跡は、平成15～20年度に範囲確認調査が実施され、本堂、本堂西建物、山門、拝殿、鎮守などの建物跡と池跡、中世墓などが検出された（下呂市教委2007・2011）。本堂跡は桁行5間の北向きの礎石建物で、正面には向拝が取り付けられる。本堂西建物跡は4×3間の北向きの礎石建物で、本堂跡と同様に向拝が取り付けられ、本堂と軒廊で連結している。山門跡は3×2間に配置された礎石が検出され、山門から本堂跡に向かって緩やかに上る直線的な通路が延びる。本堂跡から東方の尾根斜面には5×2間の西向きの礎石建物跡と、さらにその奥の尾根頂部には5×4間の西向きの礎石建物跡が検出され、前者は拝殿跡、後者は鎮守跡と推定されている。なお、拝殿跡の前面には高さ約4mの石積が残り、その北側には湧水点がある。一方、本堂跡の北北西には、林畠谷を挟んだ緩斜面上に地形に沿って配列された中世墓が検出されている。なお、本寺院からは折戸53号窯式期～東山72号窯式期（10世紀前半～後半）の碗・皿類や多口瓶が出土しており、10世紀代から信仰利用が始まったと考えられる。そして、寺院創建は出土遺物や本寺院で発見された懸仏の存在などから12世

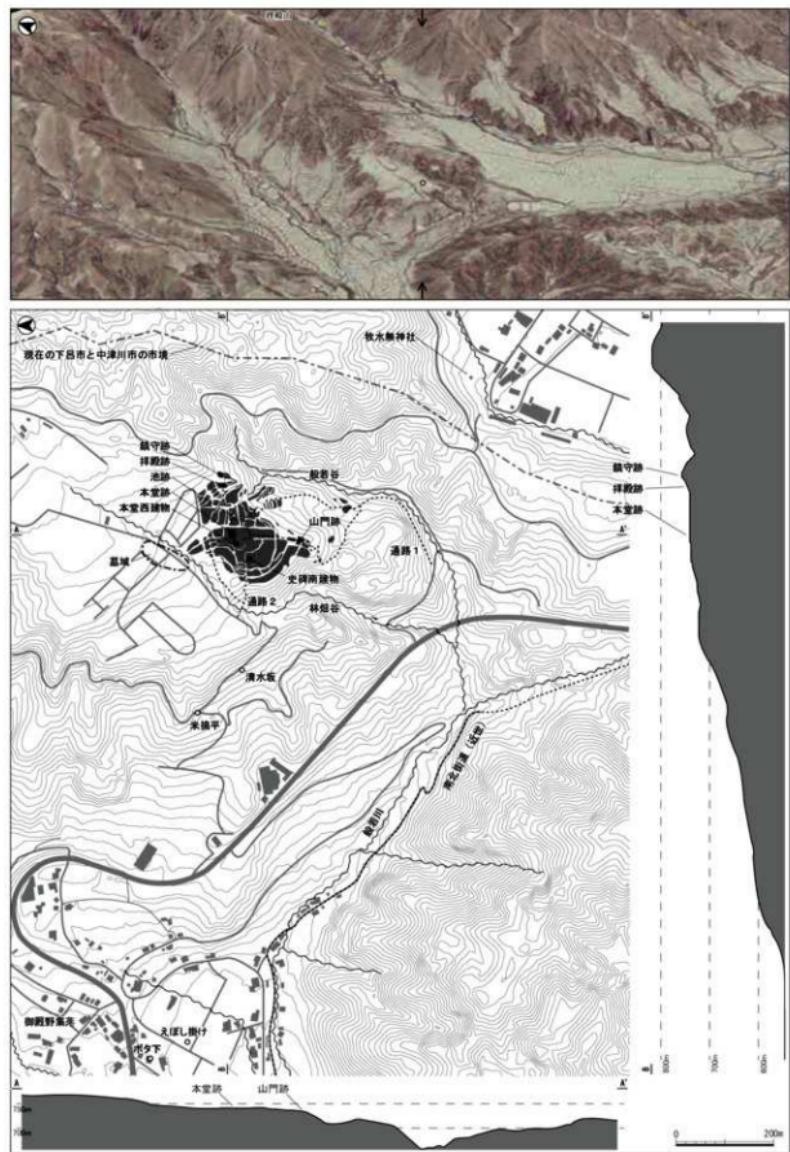


図8 大徳寺跡

紀に遡る可能性が指摘され、13世紀代に規模が拡大し、およそ17世紀代までの遺物が出土している。

このように、本寺院は北東から南西方向に延びる尾根上に位置するものの、本堂などの建物の向きや本堂から山門に至る通路などは真北を意識しており、古代的な要素を保持している。また、拝殿跡や鎮守跡などを除くと平場間の高低差が比較的小さいこと、方形あるいは長方形を意識して区画された中央付近の平場とその外縁にある地形に沿って弧を描くように整地された平場があること、本殿跡を中心に東西方向にも通路が延びていること、などの特徴も看取できる。

一方、寺域外の山麓と本寺院を結ぶ通路は、山門や本堂付近から般若谷へ延びる通路1と、史碑南建物付近から西へ延びる通路2が想定できる。通路1は美濃と飛騨を結ぶ当時の主要街道（近世の南北街道付近（岐阜県教委1983））から般若谷筋を通り、寺院まで延びていたと考えられ、寺院の入り口には山門が設けられている。一方、通路2は御厩野集落と寺院を結び、その途中には米搾平や清水坂の名称が残る。御厩野集落から本寺院までは比較的緩やかな緩斜面が続き（図8-B-B'）、その最奥の高所に鎮守・拝殿が位置し、さらに、その背面の般若谷を挟んだ対岸に美濃・飛騨の国境となる山稜が延びている。なお、美濃側の最も近い平地には牧水無神社があり、この付近には「威徳寺関係の堂塔遺址が多い」とされている（加子母村1972）。

⑤円興寺旧境内（大垣市）（図9）

山頂から延びる尾根の鞍部に位置する天台宗の寺院であり、山麓の集落域と旧境内本堂跡との比高差約105m、斜距離約560mを測る。寺伝では延暦9（790）年にこの地に仏堂が建てられ、天正2（1574）年に織田信長の兵火にかかり焼失し、その後、慶長6（1601）年に雷火によって再び焼失したとされる。

寺院地は通路1・2沿いに展開しており、通路3には「山門」¹⁰⁾と呼ばれる3×2間に配置された礎石群がある。「山門」から東斜面に沿って延びる道は金生山への「虚空藏道」であり、北へ延びる道が主要堂宇の展開する平場への参道となる。通路2のある谷部の平場は、等高線に沿うような細

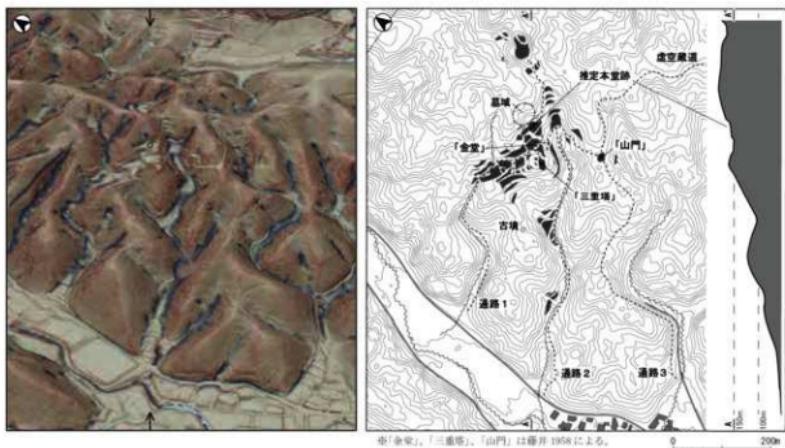


図9 円興寺旧境内

長いものと、その最奥に階段状に展開するものが認められる。また、山腹にある平場は通路 1 の南北に展開し、「金堂」とされる平場の背面には石積みが残る。また、「鐘堂」とされる最奥の平場が最も高く、その法面には高さ数メートルの石積みが確認できることから、現段階ではこの場所に本堂があったと推定したい（以下、「推定本堂跡」と記す。）。推定本堂跡の中央には南面する基壇状の高まりが確認でき、その背面の斜面には墓域が展開している。一方、通路 1 の南側の高所には「三重塔」とされる平場があり、複数の礎石が確認でき、遠方を見渡すことができる。

円興寺旧境内では平成元～8 年度に詳細分布調査がなされ、中世陶磁器や石製品が採集されている（大垣市教育委員会 1997）。山茶碗は第 5 型式（12 世紀後半～13 世紀前半）以降の時期であり、墓域では経筒と考えられる遺物も採集されている。現円興寺には平安時代の早い時期の作とされる聖觀音立像があり（清水 1990）、寺伝によれば延暦 9（790）年に仏堂が建立されたとあるため、その成立時期は平安時代前半まで遡る可能性がある。しかし、詳細分布調査では灰釉陶器が採集されていないため、現時点では、円興寺旧境内は少なくとも 12 世紀後半～13 世紀前半頃には成立しており、採集された鉢や天目茶碗の時期から 15・16 世紀頃までは存続していたと考えたい。

なお、「山門」から「虛空藏道」を経た先の金生山には明星輪寺が所在する。明星輪寺の本尊は虚空蔵菩薩であり、「虛空藏道」の名称の由来となったと考えられ、円興寺旧境内の金堂付近から明星輪寺までは直線距離で約 1500 m である。明星輪寺は延暦 20（801）年に再興したとされ、11～12 世紀前半の地蔵菩薩半跏像（清水 1990）や久安 4（1148）年銘の如法經碑、鎌倉時代の作である木造金剛力士像、明徳癸酉（1393）銘の梵鐘など、多数の文化財が残る。そのため、明星輪寺は少なくとも 12～14 世紀には活動しており、円興寺旧境内と明星輪寺は尾根筋を利用した往来が可能であったと考えられる。

⑥弓削寺旧境内（揖斐郡池田町）（図 10）

池田山の東山腹に展開する臨濟宗の寺院であり、弘仁 8（817）年に創建され、慶長 7（1602）年に現境内に移転したとされる。寺院地は現境内を含めて 3 箇所で確認でき、それぞれ時期が異なる。なお、山麓の集落域と 1 時期目の主要堂宇との比高差は約 120 m、斜距離は約 450 m を測る。

最も古い寺院地（1 時期目）は、現弓削寺から北西側の山腹に展開する。谷奥に幅約 100 m 以上の広い平場があり、その南端に長さ約 50 m の基壇状の高まりが認められ、その背面には湧水点がある。この広い平場に主要堂宇があったと考えられ、その前面に延びる谷の両側にある尾根筋には、台形から三角形状の平場が階段状に展開する。この寺院地では、過去に山茶碗、平瓦、三筋壺、四耳壺などが採集され（池田町教委 1991）、近年では第 4 型式（12 世紀中葉）以降の山茶碗が確認されている¹⁰⁾。また、中世後期の石塔類が確認できないことから、現状では少なくとも 12 世紀には機能しており、15・16 世紀頃には衰退したと考える。なお、この寺院地の山麓には平安寺が所在する。平安寺は応徳年間（1084～1087）の創建とされ、平安寺の墓地には 14 世紀代と考えられる大型五輪塔 2 基と永和元（1375）年銘、貞治 5（1366）年銘の宝篋印塔が所在し（三宅ほか 2011、横山 1996）、現本堂の南側に複数の平場が確認できる。このように平安寺と弓削寺の 1 時期目の寺院地は同時期に存在していた可能性があり、しかも、平安寺の南東部で弓削寺から延びる複数の谷の水が 1 箇所に集まるなど、両寺は山上と山下にある信仰施設として関連があったと考えられる。

2 時期目の寺院地は、現弓削寺から西側の扇状地上に遺構が確認できる。現弓削寺から高所に向か

って直線的に通路が延びており、その両側に通路に直交する方向に長軸を有する平場が階段状に展開する。その最奥は觀音堂跡という伝承が残る広い平場であり、この付近に主要堂宇があったと推定する。また、その背面の斜面には石塔部材を含む集石遺構が確認できることから、墓域を形成していたと考えられる。なお、2時期目は直線通路や小型石塔の存在などから15・16世紀には機能していたと考えられ、この寺院地には金鋳場があったとされている。

3時期目の寺院地は現弓削寺境内である。慶長7(1602)年にこの地に移転しており、本堂の前面には直線通路が延び、その両側には細長い平場が残っている。なお、2時期目と3時期目の直線通路の軸線はややずれているが、2時期目の寺院地が現本堂の東側まで展開していた可能性もある。

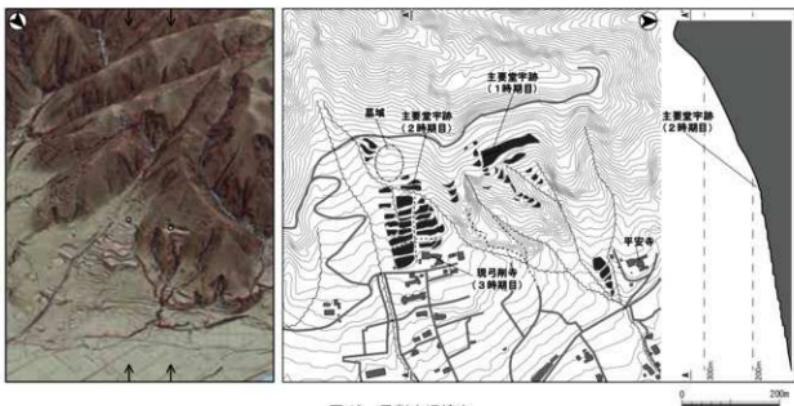


図10 弓削寺旧境内

(3) 山麓から山腹等に立地する寺院

①栗原九十九坊跡（不破郡垂井町、養老郡養老町、大垣市）（図11）

象鼻山から南宮山に延びる山地の、東山麓から尾根にかけて平場が広域に展開する天台宗の寺院であり、山麓の集落域と主要堂宇跡との比高差は約145m、斜距離は約550mを測る。本寺院は旧不破郡、養老郡、石津郡の郡境に位置する。天文14(1545)年に書き留められた文書の写しによると、鎌倉時代初期には久保双寺と呼ばれ、100以上の僧坊があり、建武2(1335)年の足利・新田の戦いにて焼失、あるいは織田信長の兵火により焼失したとされている。

山麓には水路を挟んで併行する2条の直線通路（通路1・2）があり、いずれも通路に直交する方向に長軸をもつ細長い平場が階段状に認められる。このうち、通路1に接する清水寺跡の平場が最も広く、ここには「美州不破郡栗原村清水寺奉鉄治鐘 宝治元年未丁九月廿日東大寺大工散位山河清衆徒」の銘が残る梵鐘があったとされるように、宝治元(1247)年以前には寺院が成立していたと考えられる。また、尾根筋には通路3があり、通路に沿って台形から三角形状の平面形を呈する平場が展開し、山頂付近まで延びている。山頂付近には谷奥に広い平場Aがあり、そこには後世に集められた多数の石塔が積み上げられている。また、その北側の通路を進むと幅約75mの最も広い平場にたどり着き、ここには東西約14m、南北約16mの方形基壇があることから、主要堂宇があったと推定される。そ

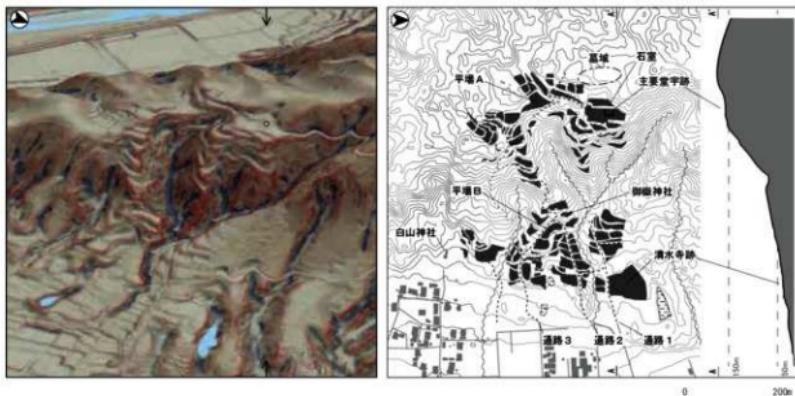


図 11 栗原九十九坊跡

の背面の斜面には角礫積みの石室（窟）が残り、さらに、その上部の尾根には墓域が展開し、石塔の部材が散在する集石遺構が広がる。

本寺院が位置する垂井町では平成 24～28 年度に遺跡詳細分布調査がなされ、本寺院からは須恵器や灰釉陶器、中世陶磁器などが採集された（垂井町教委 2017）。その成果は総合調査報告書（県文セ 2023）でも報告され、山上の平場 A と山麓の平場 B で 8 世紀の須恵器が分布していることが明らかにされている。また、山麓部では部分的に発掘調査が実施されている（県文財セ 2020）。これらの調査成果から、本寺院は 8 世紀頃には山麓と山頂において何等かの宗教施設があり、12～13 世紀頃には坊院坊舎が山全体に広がり、須恵器の分布域とは位置を変えて、引き続き中世段階も山上と山麓に主要堂宇が営まれていたと考えられる。

②桜堂遺跡・笹山遺跡（瑞浪市）（図 12）

桜堂遺跡は丘陵の南西斜面に位置する天台宗の寺院跡であり、山麓の集落域と本堂跡との比高差は約 50 m、斜距離は約 300 m を測る。桜堂遺跡は平成 23・25～27 年度に、笹山遺跡は平成 22 年度に発掘調査が実施され、桜堂遺跡からは寺院跡と中世墓、笹山遺跡からは経塚と中世墓が検出されている（瑞浪市教委 2014・2017）。

桜堂薬師は、寺伝によれば弘仁 3（812）年に瑞櫻山法明寺として創建され、元亀 2（1571）年に兵火によって焼失したとされる。しかし、それらを裏付ける資料が現在まで知られておらず、発掘調査の結果、10 世紀中頃に小規模な堂宇が創建され、12 世紀後半から 13 世紀にかけて大きく発展し、15 世紀後半に堂宇が移動（下山）したと考えられている。本堂跡は山腹の平場の最高所に位置し、掘立柱建物跡が検出されている。また、本堂跡の北側には複数の細長い平場が連続し、集石を伴う墓域を形成している。一方、笹山遺跡は桜堂遺跡のある谷の入り口付近の丘陵上に位置する経塚・中世墓群である。12 世紀後葉から 13 世紀前葉にかけて山頂部に経塚が営まれ、12 世紀末から 15 世紀後葉まで山腹に集石墓群が継続して造営されている。

なお、桜堂遺跡の北から南西にかけての河岸段丘上には「多聞坊」や「西之坊」などの複数の口伝

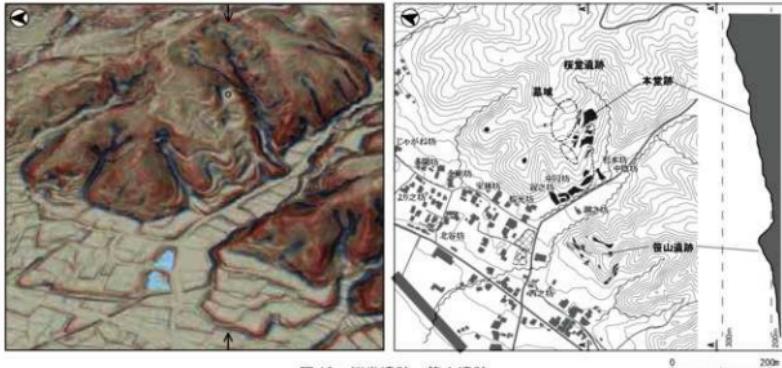


図12 桜堂遺跡・笠山遺跡

等による私称地名がある。これらの場所では中世の遺物が採集でき、寛文5（1665）年の寺領寄進絵図にも幾つかの坊名が記載されていることから、桜堂遺跡が位置する谷・丘陵を核として、その前面の河岸段丘の参道に沿って坊院坊舎が連なっていた可能性が指摘されている。このように、桜堂遺跡における中世の宗教活動の場は、谷から山麓一帯が中心となっていた可能性がある。

（4）山麓・山腹に立地する寺院の構造

山麓の緩斜面や山腹の斜面に位置する多くの寺院は、斜面を段切り造成して平場を形成し、堂宇等の施設を設置している。そして、斜面の傾斜が強いほど平場間の段差が大きく、平場の前後が急勾配となる（横蔵寺旧境内、円興寺旧境内、弓削寺旧境内（1時期目）、栗原九十九坊跡の山麓部など）。一方、緩斜面での造成では平場間の段差が小さく、平場間の往来が比較的容易で、広い平場を確保できる傾向にある（柏尾庵寺、大威德寺、栗原九十九坊跡の山麓部など）。平場の斜面には土留めのための石積みが認められ、特に主要堂宇や参道に沿った人の目に着きやすい場所には大きめの石材が用いられている（横蔵寺旧境内、威徳寺旧境内（垂井町：県文財セ2023）、懸渓寺旧境内（御嵩町：県文財セ2023）など）。

平場の平面形は、急傾斜地や谷筋では等高線に沿った細長い形状のものが目立ち、尾根上では地形に沿った三角形状や台形状のものが目立つ。また、谷筋では山門から主要堂宇に至る通路が等高線に沿って延びていることが多く、通路を歩くと通路に沿うような細長い平場を視認できる（横蔵寺旧境内、円興寺旧境内、栗原九十九坊跡など）。一方、主要堂宇に向かって直線的に延びる通路も散見でき、通路に対して直交する方向に細長い平場が通路の両側に配置される事例（柏尾庵寺、竜泉寺廃寺、弓削寺旧境内、栗原九十九坊跡など）もある。これらは、通路間や平場の両端間の距離がおよそ100m強であり、一町を基本とする単位で土地が区画された可能性がある。なお、このような地割は藤岡氏の平坦面分類のC1類に分類され、畿外での普及は15世紀以降まで降るとされている（藤岡2012）が、竜泉寺廃寺の直線通路（通路1）は、13世紀末から14世紀前半頃に整備された可能性が高いとされており、今後の調査成果が期待される。

さて、主要堂宇のある平場は谷部の最奥や平場群の最高所に位置し、その面積も広く、基壇状の高

まりや礎石が認められることが多い。主要堂宇の建物や基壇の向きは、真南を向くもの（日焼遺跡、円興寺旧境内）と地形の傾斜に準じているもの（寺屋敷遺跡、柏尾庵寺跡、竜泉寺廃寺跡、白雲山観音堂、弓削寺旧境内、栗原九十九坊跡、桜堂遺跡）、谷の開口部を向いているもの（光寿庵跡、横蔵寺旧境内、愚溪寺旧境内）などがある。しかし、大威德寺跡のように地形の傾斜に沿わずに山門から本堂までが真北を意識した構造の寺院もある。また、主要堂宇の前面には平場群が展開する事例が多く、これは他県の山寺の様相（久保 2001）とほぼ同じ状況であるといえる。さらに、西濃圏域の寺院では成立期に近い時期の遺物が平場群の最奥付近を中心に採集されており（柏尾庵寺、竜泉寺廃寺、横蔵寺旧境内、栗原九十九坊跡）、まずは緩斜面の高所や谷の最深部などの広い場所に小規模な施設等が造営され、その後、主要堂宇として機能するとともに、その前面に複数の平場が展開していくという土地利用の推移も想定できる。

なお、主要堂宇のある平場は山頂や尾根上にあることが稀で、多くは山頂付近の鞍部や尾根付近の鞍部に認められる。これは、寺院で活動する僧尼が居住や修学を行うための水の確保や、山頂に吹く強い風に対する防風などの目的があったと考えられる。特に水の確保は寺院経営にとって重要な要素であり、山水は仏にささげる聖水（闘伽水）にもなり（上原・梶川 2007）、光寿庵跡や横蔵寺旧境内、大威德寺跡などのように湧水点から本堂脇の池へと導水している事例もある。また、湧水点から流れ出る水を含め、山水は谷川を介して山麓まで流れ、集落へと水を供給しており、山水の源にある寺院は聖なる場所として信仰の対象となる。さらに、谷川が山麓において1箇所に合流する付近にも寺院が造営されており（柏尾庵寺跡、光堂寺廃寺跡、平安寺）、寺院が水利に関わっていた可能性も考えられる。

一方、主要堂宇の周辺には経塚や墓域が確認できる。寺院と経塚の位置関係が把握できる事例としては、寺城に至る入り口付近の高台に経塚が造成されるもの（桜堂遺跡と笹山遺跡（図 12）、増福寺と酒波神社経塚（瑞浪市：県文財セ 2023）、萬勝寺伝北ノ本坊跡と飯高経塚（恵那市：県文財セ 2023））と、主要堂宇の背面の山頂・山稜に造営されるもの（神光寺と洞雲戸遺跡（関市：県文財セ 2005））がある。また、柏尾庵寺跡や円興寺旧境内では墓域で経筒片が採集されており、主要堂宇の背面の斜面の高所に経塚が造営され、その周辺が後世になって中世墓群として利用されたと推測できる事例もある。その典型例としては笹山遺跡を挙げることができる。

集石と石塔が伴う墓域は、①主要堂宇の背面付近の斜面や尾根上にある場合（柏尾庵寺跡、円興寺旧境内、弓削寺旧境内、栗原九十九坊跡、桜堂遺跡）、②主要堂宇から谷や山を挟んだ離れた場所にある場合（光堂寺廃寺跡、横蔵寺旧境内、大威德寺跡、笹山遺跡）、③主要堂宇と連続する平場の一画にある場合（白雲山観音堂）、④主要堂宇に至る途中の平場にある場合（美濃市西觀音寺遺跡（美濃市教委 2012））などがある。発掘調査等は実施されていないが、筆者が現地で確認した③と同様な事例は清峰寺跡（高山市）、④と同様の事例は野上廃寺（垂井町）、円興寺旧境内（大垣市：源朝長墓・大炊家墓）、洞山寺跡（高山市）などがある。

2 寺院の存続期間と立地の変化

次に、発掘調査や詳細分布調査が実施された寺院における、遺構や遺物から推定できる存続期間と立地について検討したい。表 1 は、それらの調査成果が掲載された報告書をもとに、寺院の存続時

表 1 寺院の消長表

No.	地域	市町村名	寺院名	立地	遺物の時期	7C	8C	9C	10C	11C	12C	13C	14C	15C	16C
1	西濃	垂井町	宮代庵寺跡	平地	7c中～9c?										
2	中濃	御嵩町	願興寺跡	平地	7c中～現代										
3	岐阜	岐阜市	長良庵寺	平地	7c後～					?					
4	岐阜	各務原市	野口庵寺	平地	7c後～8c										
5	飛驒	高山市	光寿庵跡	山腹	7c後～					?					
6	岐阜	各務原市	山田寺跡	平地	7c後～9c後										
7	飛驒	飛驒市	寿楽寺庵寺跡	平地	7c後～9c後										
8	飛驒	高山市	石櫻庵寺	平地	7c後～10c										
9	西濃	池田町	高畠遺跡	平地	7c末～12c										
10	飛驒	高山市	三仏寺庵寺	平地	7c後～12c										
11	中濃	関市	弥勒寺跡	平地	7c後～15c										
12	東濃	恵那市	手向庵寺	山麓	8c										
13	飛驒	飛驒市	杉崎庵寺跡	平地	7c末・8c初～8c末・9c初										
14	飛驒	飛驒市	古町庵寺跡	平地	7c末・8c初～8c後										
15	西濃	垂井町	美濃國分尼寺	平地	8c中～9c末										
16	飛驒	飛驒市	上町庵寺跡	平地	7c末・8c初～9c後										
17	東濃	恵那市	正家庵寺跡	山麓	8c中～10c後										
18	飛驒	高山市	日燒遺跡	山腹	8c後～10c										
19	飛驒	高山市	三枝城跡	山腹	8c後～10c後										
20	西濃	大垣市	美濃國分寺跡	平地	8c中～12c末										
21	飛驒	高山市	飛驒國分尼寺跡	平地	8c～12c										
22	西濃	龜老町	柏尾庵寺跡	山麓	8c～16c前										
23	西濃	垂井町	栗原九十九坊跡	山麓～山頂	8c～現代										
24	飛驒	飛驒市	西ヶ洞庵寺跡	山麓	9c後～10c										
25	西濃	揖斐川町	橫藏寺旧境内	山腹	9c後～14c前										
26	西濃	揖斐川町	寺平遺跡	山腹	9c後～10c										
27	西濃	揖斐川町	寺屋敷遺跡	山腹	10c～11c前										
28	東濃	恵那市	大船寺跡	山腹	10c～								?		
29	中濃	郡上市	白雲山觀音堂	山腹	10c～15c										
30	東濃	瑞浪市	桜堂遺跡	山麓～山頂	10c中～15c後										
31	飛驒	下呂市	大威德寺跡	山腹	10c～17c										
32	西濃	池田町	弓削寺旧境内	山腹	12c～								?		
33	西濃	大垣市	圓興寺旧境内	山腹	12c後～15c?										?
34	西濃	養老町	竈風寺庵寺跡	山麓	12c初～15c										
35	西濃	養老町	光堂寺庵寺跡	山麓	12c～16										
36	岐阜	岐阜市	千姫敷遺跡	山麓	13c～15c										
37	東濃	恵那市	饑定寺遺跡	山麓	13c中～16c前										
38	東濃	恵那市	大円寺跡	平地	14c前～16c後										
39	東濃	多治見市	永保寺寺院跡	平地	14c～現代										
40	岐阜	各務原市	承国寺遺跡	平地	15c中～16c前										

※参考文献は文書末に記載した。

凡例



遺構が存続した時期

?

遺物が確認された時期

寺院の終焉時期が不明

期や遺物の時期を一覧表にしたものである¹²⁾。表1をみると、寺院及びその関連遺跡における遺構・遺物の始まりは、7世紀代・8世紀代・9世紀後半～10世紀代・12～13世紀代が目立ち、その終わりは8世紀代・9世紀後半～10世紀代・12世紀代・15～16世紀代が多いようである。そのため、寺院及びその関連遺跡の存続期間の画期として、7世紀代・8世紀代・9世紀後半～10世紀代・12～13世紀代・15～16世紀代の5時期を設定し、以下に各時期を概観したい。

なお、寺院は「地域社会の影響を受けて展開」(藤岡2012)しており、「里山、村里、水陸交通といった場での、社会生活に不可分な役割を果たしていた」(上川2014)とあるように、その存続期間を検討する上では地域社会の動向との比較が重要となるため、ここでは既存の集落遺跡の研究も加味して検討する。

(1) 7世紀代

美濃・飛騨において、寺院が創建される時期である。7世紀中頃から後半には、いわゆる川原寺式の瓦が入る前段階の瓦が確認された寺院として宮廻寺跡・宮代廃寺・厚見廃寺・順興寺廃寺などがあり（井川 1994）、これらの寺院はいずれも平地に位置し、宮廻寺跡と宮代廃寺・順興寺廃寺などはそれぞれ濃尾平野を西端と東端に位置する寺院といえる。また、7世紀後半には美濃・飛騨で寺院の創建数が増加し、その多くは平地に造営されている。特に厚見郡や各務郡では一郡内でも複数の寺院が造立され、各務郡の寺院は互いに同范関係も確認されていることから、建立に際しても密接な関係を有していたとされる（林 2021）。そのような中で光寿庵跡のみが山腹に位置していることは重要であり、すでに菱田氏が指摘しているように（菱田 2023）、光寿庵跡と石橋廃寺は山寺と平地寺院が一对となる存在形態の典型例として評価でき、畿内で形成された寺院間のネットワークの伝播（上原 2002）が確認できる一事例といえよう。

また、各務郡を中心とした美濃の集落遺跡の消長を分析した渡辺氏は、7世紀後葉が美濃における大きな社会変化の時期であったとし、須恵器生産の美濃須衛窯への一元化や古代寺院の造営などが同時期の集落の動向にも反映しているとした（渡辺 2003）。

(2) 8世紀代

国分寺・国分尼寺が創建される時期であり、7世紀代の寺院が確認されていない東濃圏域でも、この時期になって正家廃寺や手向廃寺などの寺院が創建される。8世紀代の寺院も平地に造営されることが多いものの、正家廃寺や手向廃寺などは現集落から數10m程高い丘陵上に造営されている。

国分寺・国分尼寺周辺においては、美濃では栗原九十九坊跡や柏尾廃寺跡などで8世紀代の遺物が採集され、飛騨では日焼遺跡や三枝城跡などで鉄鉢や多口瓶など仏教的要素の強い遺物が出土している。これらの遺跡の特徴として、採集・出土した8世紀代の遺物がそれほど多くなく、構造も判然としないことが挙げられ、山中には建物等がなかったか、存在したとしても草庵程度の小規模な建物であったと考えられる。菱田氏が「これらの諸寺に国分寺僧の活動を重ねることは妥当」（菱田 2023）としたように、これらの遺跡は国分寺から約10kmの範囲内に所在し、僧尼の山林修行の場などとして機能した可能性がある。一方で、これらの遺跡の山麓付近の平地には、須恵器等の遺物が集中して分布する遺跡が近接している。具体的には栗原九十九坊跡の東側の栗原山麓遺跡（垂井町 2017）、柏尾廃寺の東側の戸門遺跡（養老町 2007）、日焼遺跡や三枝城跡の南側の野内遺跡（県文財セ 2009・2012）であり、このうち戸門遺跡の性格は郡衙もしくは寺院が想定され、野内遺跡の村落の形成には官衙（公的施設）などの関与が想定されている。このように、国分寺僧の活動が想定できる遺跡の近辺には一般的な集落遺跡とは異なる性格をもつ遺跡が展開しており、その居住者は国分寺を維持管理するための経済的な援助や僧尼の活動を支援するなど、国分寺僧と何等かの関連性があったと考えられる。

(3) 9世紀後半～10世紀代

山麓や山腹に多くの寺院（もしくは宗教施設）が造営される時期である。寺院の立地は多様であり、西ヶ洞廃寺のように山麓にある寺院や、寺平遺跡・寺屋敷遺跡・日焼遺跡のように8世紀代と同様な平地から數10m高い位置にある寺院、横蔵寺旧境内・白雲山觀音堂・大威德寺跡・大船寺跡（惠那市）などのように、平地との比高差が100m以上ある寺院などがあり、特に横蔵寺旧境内や大船寺跡など

は現集落域から 200 m 以上離れた山中に造営され、8世紀代と比較するとかなり人里から遠い場所での寺院の造営が認められる。

しかし、寺院といつても桜堂遺跡では小規模な山寺が想定され（瑞浪市 2017）、大威徳寺跡や横蔵寺旧境内でも出土遺物の少なさから小規模な施設の存在が想定できる。また、白雲山觀音堂や大船寺跡、三枝城跡も山頂付近の寺院（もしくは宗教施設）であるものの、数段の平場が確認できる程度の広さであり、この様相は平地から数 10 m の位置にある寺平遺跡、寺屋敷遺跡などでも同じである。つまり、この時期は斜面を切り盛りによって段造成し平場を形成しているものの、数段程度の小規模な造成に留まることから、現時点では山中に平場が広域に展開するのは中世以降と考えておきたい。

なお、この時期には 7・8 世紀に創建された幾つかの寺院が廃絶している。特に飛騨圏域においては、発掘調査が実施された古代寺院のうち寺院に伴う遺構が中世まで継続する事例は確認されておらず、いずれもこの時期までに廃絶しているという特徴がある。飛騨圏域においては、先述した野内遺跡の遺構が 10 世紀後半頃に激減しており、郡衙に関わる中枢施設であった可能性が指摘されている上町遺跡も 10 世紀後半に集落が途絶するとされている（飛騨市教委 2023）ように、寺院と集落の盛衰が連動している状況が看守できる。

（4）12世紀～13世紀代

山麓・山腹において、11 世紀以前から存続している寺院の寺域が拡大し、かつ複数の平場を有する寺院が造営され始める時期である。発掘調査や分布調査の結果、前段階以前に成立した桜堂遺跡や大威徳寺跡ではこの頃の遺構が広域に確認され、柏尾庵寺跡では遺物の採集場所が広がり、採集された遺物量も増えている。また、西濃圏域では弓削寺旧境内や円興寺旧境内、竜泉寺魔寺や光堂寺魔寺などの大規模な寺院の造営がこの時期から始まるようであり、同圏域にある 8 世紀から存続していた美濃国分寺や高畠遺跡などの伽藍を有する寺院の機能が認められなくなる時期に、その周辺の山麓・山腹に新たに寺院が成立・拡大する状況が看取できる。また、この時期は美濃における中世集落の開始期であり（内堀ほか 2002）、美濃における中世寺院の成立と寺域の拡大は、集落の成立と軌を一にしている。

さらに、この時期は、養老町域の寺院（柏尾庵寺、光堂寺魔寺、竜泉寺魔寺）が近接する谷ごとに大規模な寺域を形成し、寺院群として機能した時期もある。このような谷ごとに寺域を形成する事例として、鎌倉時代の最盛期には「六谷六院、神社仏閣三十宇、衆徒三百六十坊」があったとされる白山信仰の拠点である長瀧寺（郡上市）周辺も同じ状況であったと考えられる。

（5）15世紀～16世紀代

古代や中世前期から存続していた山麓や山腹に位置する寺院の多くが衰退し、代わりに平地を中心には寺院数が急増する時期である。発掘調査や詳細分布調査の結果では、15～16 世紀代に山麓や山腹の寺院が衰退する事例が多く、同時期に新たに出現する寺院の調査例は少ない。一方で、総合調査の結果では 15 世紀後半における寺院の成立数が顕著で、その多くが平野や山麓に造営されている（表 2・3）。また、美濃における中世集落の多くは山茶碗第 11 型式（15 世紀中葉前後）まで廃絶し、それ以降は位置を変えて存続する可能性が高いと指摘されている（内堀ほか 2002）。15 世紀後半に新たに創建された中世寺院は現在の集落とほぼ重なる位置に多く認められることからも、集落の集村化に

表2 時期別・団域別の成立数（総合調査報告書（県文財セ2023）の数値から作成）

	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	合計											
西濃	3	18	11	35	4	7	10	2	3	2	16	13	9	15	18	10	78	65	55	67	60	26	527
岐阜	20	25	8	18	4	3	4	2	0	3	20	26	12	13	23	13	71	60	78	63	43	25	534
中濃	6	27	3	7	1	5	8	1	2	2	8	7	15	12	21	13	46	40	75	54	46	22	421
東濃	1	3	2	2	2	0	1	0	0	3	3	5	1	10	9	7	6	12	32	36	22	3	160
飛騨	6	9	1	0	0	1	1	0	0	0	4	2	8	6	2	2	27	47	14	16	9	2	157
合計	36	82	25	62	11	16	24	5	5	10	51	53	45	56	73	45	228	224	254	236	180	78	1799

※横軸：西暦（50年単位）、縦軸：団域

各団域の合計数の1割以上の数値

表3 時期別の立地数（総合調査報告書（県文財セ2023）の数値を引用・合計値のみ追記）

	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	合計											
平地	24	20	7	27	3	3	9	0	1	5	16	23	14	14	24	18	112	106	133	172	148	75	954
山麓	5	19	6	4	3	1	2	0	0	1	11	2	12	15	24	12	47	59	100	84	88	38	533
山腹等	2	6	7	6	1	2	5	3	2	1	3	0	4	5	9	5	2	3	15	9	13	4	107
不明	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	4	3	1	3	1	15			
合計	32	45	20	37	7	6	16	3	3	7	30	25	30	34	58	36	161	172	251	266	252	118	1609

※横軸：西暦（50年単位）、縦軸：団域

併い、寺院も現集落と重なった位置に造営されていったと考えられる。なお、15世紀後半には、西濃・岐阜・中濃・飛騨団域において真宗寺院の興隆が際立つ一方で、真宗寺院が少ない東濃団域では15世紀後半における寺院数の増加は認められない。そのため、この時期の寺院数の動向は、主に真宗寺院の布教活動と関連する可能性がある。

なお、養老町の柏尾廃寺跡では16世紀後半には主要堂宇や墓域での遺物採集がなく、同町の竜泉寺廃寺跡でも16世紀の遺物は主要堂宇で採集されていない。同様に、瑞浪市の桜堂遺跡でも15世紀後半には山中の本堂は別の場所に移動したと推定されている。その一方で、これらの寺域には16世紀代の石塔・石仏が多く認められ、特に柏尾廃寺では16世紀後半から17世紀代と考えられる石仏が1000基近く存在する（竹田2020）。このように、山中の主要堂宇の機能が低下してもなお多数の供養塔が寺域に納められたことは、寺院のあった場所そのものが後世になって信仰の対象地として認識され続けていたためであると考えられる。

おわりに

5年間に及ぶ総合調査では、県内の市町村史に掲載されている近世以前の寺院を網羅的に調べ上げ、その所在位置や時期を整理するとともに、主要な寺院の地形観察図を作成し、構造等を分析できたことに大きな意義があったと考える。これは、開発行為等との調整や遺跡の保存整備・活用のための基礎資料となることはもちろんのこと、本県の歴史や文化をさらに詳しく探求するための貴重なデータであり、他県の状況と比較する際の素材となり得る。この成果を総合調査報告書の刊行で終わりとせず、むしろこれを始まりとして、新たな調査研究や保存活用事業等を展開していくことが大切である。

その取組みを進めるために、小稿では総合調査における課題を研究テーマとして取り上げた。ここでは、詳細分布調査や発掘調査が実施された岐阜県の古代・中世寺院を概観し、その立地や構造、存続時期などの分析を試みたが、詳細分布調査にて地表面で観察できる遺構の特徴は、その寺院の最終

段階（廢絶時）の姿であり、遺構の変遷や詳細な時期の検討には限界がある。よって、小稿で提示した寺院の画期の設定は、発掘調査等の進展とともに見直しを図る必要があろう。今後のさらなる調査研究や事業展開に期待したい。

謝辞

小稿の執筆に際し、以下の方々からご高配を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

今津和也、岩田崇、岩原剛、内堀信雄、大下永、大須賀広夢、押井正行、亀田剛広、上川通夫、後藤建一、竹田憲治、中島和哉、林正憲、菱田哲郎、廣瀬正嗣、藤岡英礼、松井一明、水谷豊、溝口彰啓、三宅唯美、三好清超、三輪嘉六、村木二郎、山路裕樹、横幕大祐

【令和5（2023）年4月校了】

注

- 1) 総合調査の期間中、筆者は岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課に所属し、総合調査を補助した。
- 2) 総合調査報告書では「平坦面」と表現しているが、場所によって面として人為的に形成されたか否かの判断が困難な場合もあるため、小稿では「平場」と表現する。
- 3) 小節で用いる挿図は、寺院が立地する地形や山麓との集落との位置関係を把握するために大縮尺で作成したが、平場の詳細については総合調査報告書を参照されたい。また、挿図では地形の理解を共有するために、令和3年10月に公開された「ぎふ森林情報 WebMAP」を活用した。なお、小稿での寺伝や縁起等の記載は、引用文献を示していない場合は原則として総合調査報告書からの引用である。
- 4) 小稿での土地に関する表現は、山路氏の提言（山路 2011）に従い、金堂・塔などからなる宗教空間と蔵・厨からなる運営空間を「伽藍地」とし、「寺院地」には伽藍地と園地などの「附属施設」を含める。また、寺が所有する一切の土地を「寺地」とし、寺地のうち「寺院地」以外の領地を「寺領地」とする。なお、寺域は寺院地の広がりを示す語として用いる。また、各寺院の平場に「金堂跡」、「本堂跡」などの既存の名称がある場合は引用文献を示した上でその用語を使用し、既存の名称がない場合は「主要堂宇」等の表現を用いた。
- 5) 養老町教育委員会中島和哉氏、廣瀬正嗣氏の御教示による。
- 6) 近年の研究では、光寿庵跡と石橋庵寺出土の素文縁單弁八弁蓮華文軒丸瓦は8世紀中頃以降に制作されたものと考えられている（三好 2019）。
- 7) このことは、すでに『国府町史』（国府町史刊行委員会 2011）や牛丸氏（牛丸 2011）、菱田氏（菱田 2023）の論考でも触れられている。
- 8) 引用文献に遺物の年代が示されていない場合は、既存の文献（愛知県史編さん委員会 2007）を参考にした。
- 9) 久保智康氏は、古代の山寺に関して、平安時代に遡る仏像・仏具などの美術工芸品を伝える寺院で、その開山・中興伝承が平安以前に遡る場合は、少なくとも平安時代のある時期には活動していたとした（久保 2012）。
- 10) 寺院跡の踏査報告が藤井治左衛門氏によってなされ（藤井 1958）、氏が使用した堂等の名称は「」（カッコ）で示した。
- 11) 池田町教育委員会横幕大祐氏の御教示による。
- 12) 寺院の前身となる宗教施設の遺構が検出されている場合は、その時期から遺構が存続しているものとして示した。

引用文献

- 愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史 別編 実業 2 中世・近世 濱戸系』
- 井川祥子 1994『古代美濃国における軒瓦の様相』『岐阜市歴史博物館 研究紀要』8
- 池田町教育委員会 1991『池田町遺跡地図(改訂版)』
- 上原真人 2002『古代の平地寺院と山林寺院』『佛教藝術』265
- 上原真人・梶川敏夫 2007『古代山林寺院研究と山科安祥寺』『皇太后の山寺—山科安祥寺の創建と古代山林寺院—』柳原出版
- 上原真人 2011『国分寺と山林寺院』『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館
- 牛丸岳彦 2011『清峰寺の立地と伽藍配置について』『応永飛驒の乱600年記念誌 姉小路と廣瀬』姉小路家・廣瀬家 特別事業実行委員会
- 内堀信雄・小野木学・山田哲也・井川祥子・島田崇正 2002『美濃地域における中世集落の様相』『東海の中世集落を考える』第9回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 恵那市教育委員会 2000『正家庭寺Ⅱ・寺平遺跡』
- 恵那市教育委員会 2018『正家庭寺Ⅲ・寺平遺跡』
- 大垣市教育委員会 1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書一解説編一』
- 大下永 2018『飛驒における中世山寺の空間構造について』『斐太紀』平成30年秋季号
- 小川榮一 1939『柏尾庵寺址』『岐阜縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第八輯 岐阜縣
- 小野木学 2019a『小型五輪塔製作の一事例』『中世石工の考古学』高志書院
- 小野木学 2019b『美濃の一石五輪塔』『研究紀要』第5号 岐阜県文化財保護センター
- 加子母村 1972『加子母村誌』
- 梶川敏夫 2007『平安京周辺の山林寺院と安祥寺』『皇太后の山寺—山科安祥寺の創建と古代山林寺院—』柳原出版
- 上川通夫 2014『中世山寺の基本構造—三河・尾張の事例から—』『愛知県立大学日本文化学部論集』第6号
- 上川通夫 2023『文献からみた古代・中世の寺院』『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』岐阜県文化財保護センター
- 岐阜県教育委員会 1983『歴史の道調査報告書 南北街道』
- 岐阜県文化財保護センター 2001『寺風敷遺跡・磯谷口遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2005『重竹遺跡・上西田遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2009『野内遺跡B地区』
- 岐阜県文化財保護センター 2012『野内遺跡C地区』
- 岐阜県文化財保護センター 2020『栗原九十九坊跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2021『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 久保智康 2001『古代山林寺院の空間構成』『古代』第110号 早稲田大学考古学会
- 久保智康 2012『宗教空間としての山寺と社—古代出雲を例に—』『季刊考古学』第121号 (株)雄山閣
- 下呂市教育委員会 2007『鳳慈尾山大威德寺跡 平成15~18年度範囲確認調査報告書』
- 下呂市教育委員会 2011『鳳慈尾山大威德寺跡 平成19~20年度範囲確認調査報告書』
- 国府町教育委員会 2005『石橋庵寺調査報告書』

- 国府町史刊行委員会 2011『国府町史 通史編』Ⅰ
- 佐藤光一編 2019『白雲山銀音堂』
- 清水眞澄 1990「岐阜県の仏像」『岐阜県の仏像』岐阜県博物館
- 斎藤忠 1996「いわゆる山寺の諸問題」『大知波岐廃寺シンポジウム事業報告書 平成7年度』湖西市・湖西市教育委員会
- 坂本廣博 1982「横蔵寺の歴史」『古寺巡礼 東国6 横蔵寺』淡交社
- 竹田憲治 2020「東海 中世末・近世初頭の石塔の展開」『中世墓の終焉と石造物』高志書院
- 垂井町教育委員会 2017『垂井町遺跡詳細分布調査報告書』(1)
- 富永樹之 2006「東国の「村落内寺院」の諸問題—千葉縣以外を主体として—」『在地社会と仏教』奈良文化財研究所
- 名古屋大学考古学研究室編 1974『大和村の遺跡』大和村教育委員会
- 早川万年 2003「造寺と建都」『美濃國戸籍の総合的研究』大洋社
- 林正憲 2021「美濃地域における古墳から寺院への変遷過程」『昇殿の丘に集う—中井正幸さん還暦記念論集—』
- 菱田哲郎 2023「他地域との比較からみた岐阜県の古代寺院」『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査』岐阜県文化財保護センター
- 飛騨市教育委員会 2023『上町遺跡8』
- 藤井治左衛門 1958「円興寺旧址を探る」『岐阜史学』第23号
- 藤岡英礼 2012「空間構造」『季刊考古学』第121号 (株)雄山閣
- 藤澤一夫 1956「寺址」『日本考古学講座』1 河出書房
- 藤澤良祐 2001「理納された古瀬戸製品—特に大型壺・瓶類を中心として—」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』X
- Ⅷ
- 文化庁文化財部記念物課監修 2013『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』同成社
- 瑞浪市教育委員会 2014『後山遺跡』
- 瑞浪市教育委員会 2017『桜堂遺跡』
- 美濃市教育委員会 2012『美濃観音寺山古墳・長福寺遺跡・西観音寺遺跡・東観音寺遺跡』
- 三宅唯美・小野木学・中島茂・砂田普司・竹谷充生 2011「瑞浪市の中世石塔」『瑞浪市歴史資料集』第1集 瑞浪市陶磁資料館
- 三好清超 2019「飛騨における軒瓦の一様相」『古代寺院史の研究』思文閣出版
- 山路直充 2011「寺の空間構成と国分寺—寺院地・伽藍地・付属地—」『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館
- 大和町教育委員会 1994『白雲山銀音堂中世墳墓発掘調査報告書』
- 横山住雄 1996『岐阜県の石仏石塔』濃尾歴史研究所
- 養老町教育委員会 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』
- 養老町教育委員会 2016『竜泉寺廃寺跡分布測量調査報告書』
- 渡辺博人 2003「美濃の集落」『美濃國戸籍の総合的研究』大洋社
- 表1 参考文献** (番号は表1のNo.に対応)
- 垂井町教育委員会 1973『史跡宮代廃寺跡発掘調査報告』
 - 梶原義実 2022「願興寺本堂の発掘調査」『発掘調査講演会』御嵩町教委
 - 岐阜市教育委員会 1999『城之内遺跡—長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査—』

- 4 各務原市埋蔵文化財調査センター 1993『野口庵寺A地区の発掘調査報告書』
- 5 国府町史刊行委員会 2011『国府町史 通史編I』
- 6 各務原市埋蔵文化財調査センター 2010『山田寺跡』
- 7 岐阜県文化財保護センター 2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』、同 2005『太江遺跡』II
- 8 高山市教育委員会 2005『石橋庵寺調査報告書』
- 9 岐阜県文化財保護センター 2000『高畠遺跡』
- 10 高山市教育委員会 2003『三仏寺廃寺跡発掘調査報告書』
- 11 関市教育委員会 2009『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺跡 一講堂跡発掘調査 平成9・10年度-』
- 12 山岡町教育委員会 1988『山岡町文化財調査報告書：山岡廃寺跡（手向廃寺跡）』
- 13 古川町教育委員会 1998『杉崎廃寺跡発掘調査報告書』
- 14 飛騨市教育委員会 2023『上町遺跡8』
- 15 垂井町教育委員会 2010『美濃国分尼寺跡発掘調査報告書』
- 16 飛騨市教育委員会 2023『上町遺跡8』
- 17 恵那市教育委員会 2009『正家庵寺跡II・寺平遺跡』、同 2018『正家庵寺跡III・寺平遺跡』
- 18 岐阜県文化財保護センター 2021『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』
- 19 岐阜県文化財保護センター 2011『三枝城跡』
- 20 大垣市教育委員会 2005『美濃国分寺跡』
- 21 高山市教育委員会 1990『飛騨国分尼寺跡発掘調査報告書』
- 22 養老町教育委員会 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』
- 23 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 24 岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2006『西ヶ洞廃寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平5号古墳』
- 25 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 26 岐阜県文化財保護センター 2003『寺平遺跡』
- 27 岐阜県文化財保護センター 2001『寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡』
- 28 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 29 大和町教育委員会 1994『白雲山観音堂中世墳墓発掘調査報告書』
- 30 瑞浪市教育委員会 2017『桜堂遺跡-範囲内容確認調査報告書-』
- 31 下呂市教育委員会 2007『鳳慈尾山大威德寺跡』
- 32 池田町教育委員会 1991『池田町遺跡地図（改訂版）』
- 33 大垣市教育委員会 1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書-解説編-』
- 34 養老町教育委員会 2016『童泉寺廃寺跡分布測量調査報告書』
- 35 養老町教育委員会 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』
- 36 内堀信雄 2021『戦国美濃の城と都市』高志書院
- 37 恵那市教育委員会 1991『規定寺遺跡発掘調査報告書』
- 38 井上喜久男 1982「岐阜県恵那郡岩村町大円寺跡出土の陶磁」『瑞浪陶磁資料館 研究紀要』第1号
- 39 多治見市教育委員会 2007『永保寺庫裡跡発掘調査報告書』、同 2011『永保寺本堂跡発掘調査報告書』
- 40 各務原市埋蔵文化財調査センター 2005『承国寺遺跡発掘調査報告書』

大名による寺院の移転とその意義について

柳田 尚人

はじめに

岐阜県文化財保護センターでは、平成30年から令和4年までの5年間に「岐阜県古代・中世寺院跡総合調査」(以下、「総合調査」と記す。)を実施し、令和5年3月に報告書を刊行した。報告書総括では県内の古代・中世寺院の様相を概観し、歴史的位置付けについてまとめ、その第3節「5地域有力者との関係」で、「岐阜城下に当たる金華地区には、戦国大名の指示によって寺院が移転、寺町が形成された」点について取り上げた¹⁾。これは篠田壽夫氏が「岐阜市金華地区的寺院配置考」で岐阜城下における寺院の配置について詳細に分析されており²⁾、その研究成果を踏まえている。このような地域の支配者が寺院を移転させ寺町を形成する事例は、岐阜城下以外の県内各地でも確認できる。しかし、報告書作成の段階では岐阜城下以外の様相について集約できていなかった。そこで小稿では、同報告書の「寺院一覧表・参考寺院一覧表」等を手がかりに大名³⁾が主体となって移転している寺院を抽出し、寺院移転が行われている時期、地域、移転を主導した大名について集約、考察する。また、そこから読み取れる大名の意図や寺院機能について検討する。なお、関係する寺院の抽出や考察には各寺院に伝わる由緒を中心に行う。伝わっている情報がどこまで正確か判断することは難しく、その取扱いについては注意が必要である。しかし、由緒以外の資料だけでは情報量が少なく全体像を把握することは難しい。よって、小稿の課題を考えるうえで由緒を参考にすることは、必要不可欠であると考え、先行研究⁴⁾に倣い論を進める。

1 大名が主導する寺院移転の様相

(1) 寺院移転の時期と地域

岐阜県内における寺院移転の推移は総合調査の報告書(以下、「報告書」と記す。)の総括で記述しているとおり、「12世紀後半まで限られた数しか確認することができない。13世紀前半から15世紀前半までは一定数の移転を確認でき、15世紀後半に飛躍的に増加する。その後、17世紀後半まで移転数の多い状態が続く。」⁵⁾それらの寺院の移転理由については、由緒を確認しても不明な場合が多い。しかし、一部で大名等によって移転を強いられているケースがある。また、その移転先が城内や城下町であることを示すような記述も多く見つけることができる。そこで、移転の記録がある寺院のうち、移転に大名の意思が関わっていると思われる寺院を抽出し、移転の時期、移転を主導した大名、城や城下町形成との関りがあるかを確認した。その結果をまとめたものが表1である⁶⁾。そこからわかることについて順に説明する。

まず「移転時期」についてである。大名が主導する移転寺院が初めて確認できるのは15世紀で、その後増加し、17世紀前半にピークを迎える。17世紀後半からは減少していく(図1)。報告書でも触れたとおり、移転寺院全体の変化(図2)は、16世紀半ばから17世紀末までの150年間移転の多い状態が続いているので、移転数が増えたことと大名主導の移転が増えたことには別の理由があると考えられる⁷⁾。

表1 大名主導によって移転した寺院一覧（1）

報告書の寺院番号	寺院名	移転時期	移転を主導した大名	移転前の場所(現市町村名)	移転前に関連する城郭	移転先の場所(現市町村名)	移転先に関連する城郭
19049	円徳寺	1400年代半ばか	東常縁	郡上市	—	郡上市	—
14045	報恩寺	1500年代半ばか	生駒氏	可児市	—	可児市	—
03079	桂峯寺	1504～20年頃	江馬時直	高山市	—	高山市	—
01003	美江寺	1532～55年頃	齋藤道三	瑞穂市	—	岐阜市	稻葉山城
19036	安養寺	1539年	変元彌	郡上市	—	郡上市	—
19093	林慶院	1552年	遠藤盛教	郡上市	—	郡上市	鶴尾山城
20030	龍泉寺	1554年	三木良頼	下呂市	—	下呂市	桜洞城
02260	渡部院	1558～1570年頃	氏家直元	大垣市	—	大垣市	大垣城
01252	大宝寺	1562年	齋藤義龍	岐阜市	—	岐阜市	稻葉山城
02095	善念寺	1563年	氏家卜全	大垣市	—	大垣市	大垣城
01055	蟹願寺	1567年	織田信長	愛知県清須市	清州城か	岐阜市	岐阜城
01061	誓安寺	1567年	織田信長	愛知県清須市	清州城か	岐阜市	岐阜城
01108	蓮生寺	1567年	織田信長	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01118	円徳寺	1567年	織田信長	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01057	大乗寺	1567年頃か	織田信長	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01413	西野不動堂	1567年頃か	織田信長	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01308	法華寺	1576年	織田信長	愛知県清須市	—	岐阜市	岐阜城
01058	安養寺	1576年頃か	織田信忠	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01060	含政寺	1576年頃か	織田信忠	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01272	勝林寺	1578～92年頃	織田信長か	愛知県小牧市	小牧山城か	岐阜市	岐阜城
03011	大雄寺	1588年頃か	金森長近	高山市	—	高山市	高山城
19036	安養寺	1588年	織菴貞通	郡上市	—	郡上市	郡上八幡城
03035	高山別院照應寺	1588年	金森長近	白川村	—	高山市	高山城
03036	照應寺	1588年	金森長近	白川村	—	高山市	高山城
02201	善教寺	1589年	羽柴秀勝	羽島市	—	大垣市	大垣城
01056	極楽寺	1592～1600年頃	織田信秀	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
34001	愛尊寺	1592年	豊臣秀吉	坂祝町	猿啄城	坂祝町	猿啄城
03053	真蓮寺	1600年	金森長近	白川村	—	高山市	高山城
14065	妙願寺	1600年	森忠政	可児市	美濃金山城	長野県飯野市	海津城
10005	淨光寺	1601年	松平家乗	群馬県伊勢崎市	那波城か	恵那市	岩村城
10034	盛義寺	1601年	松平家乗	群馬県伊勢崎市	那波城か	恵那市	岩村城
07009	教泉寺	1605年頃か	金森長近	美濃市	—	美濃市	小倉山城
07010	廟念寺	1605年頃か	金森長近	美濃市	—	美濃市	小倉山城
07008	来昌寺	1605年頃か	金森長近	美濃市	—	美濃市	小倉山城
07018	清泰寺	1605年	金森長近	美濃市	—	美濃市	小倉山城
21021	常安寺	1605年	今尾城主	海津市	—	海津市	今尾城
02062	淨尊寺	1609～1615年頃	石川忠選	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
01141	専長寺	1610年	加藤貞泰	岐阜市	—	岐阜市	黒野城
01372	正木御坊	1610年	加藤貞泰	岐阜市	—	岐阜市	黒野城
21082	慈眼寺	1611～1628年頃	徳永昌重	海津市	—	海津市	高須城
36017	妙雲寺	1611年	大島光政	川辺町	—	川辺町	—
01250	瀬国寺	1615年	徳川家康	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
09088	真福寺	1615年	徳川家康	羽島市	—	愛知県名古屋市	名古屋城
02062	淨尊寺	1624～1645年頃	岡部長盛	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
02201	善教寺	1628年	岡部長盛	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
19091	慈恩寺	1631年	遠藤慶隆	郡上市	—	郡上市	郡上八幡城
02010	文殊寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02018	圓通寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02034	常楽寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02231	今昌寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02240	常隆寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02263	南光院	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02264	圓勒寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02034	常楽寺	1638年	戸田氏鉄	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
10034	盛義寺	1638年	松平家寿	恵那市	岩村城	浜松市	浜松城
10050	妙仙寺	1638年	丹羽氏信	愛知県日進市	岩崎城	恵那市	岩村城
01414	久々院	1639年	松平光重	兵庫県明石市	—	岐阜市	加納城
01416	圓勒院	1639年	松平光重	兵庫県明石市	—	岐阜市	加納城
17045	円城寺	1649年	金森重直	飛驒市	—	飛驒市	—

表1 大名主導によって移転した寺院一覧（2）

報告書の寺院番号	寺院名	移転時期	移転を主導した大名	移転前の場所(現市町村名)	移転前に関連する城郭	移転先の場所(現市町村名)	移転先に関連する城郭
02231	全昌寺	1651年	戸田氏信	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
02062	淨専寺	1652～1655年頃	戸田氏信	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
02201	善教寺	1655年	戸田氏信	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
14006	無量寺	1659年	原氏	可児市	—	可児市	—
18068	智勝院	1661年	松平光重	本巣市	—	本巣市	—
02034	常楽寺	1662年	戸田氏信	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
02264	般若院圓鏡寺	1672年	戸田氏西	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
08004	天歎寺	1680年	鳴利尚	瑞浪市	—	瑞浪市	—
10100	赤葉師	1686年	丹羽氏音	恵那市	—	恵那市	岩村城
02014	正覚院	1690年	高木新兵衛	大垣市（上石津）	—	大垣市（上石津）	—
10050	妙仙寺	1702年	丹羽氏音	恵那市	岩村城	新潟熱妙高市	高柳陣屋
10050	乗政寺	1702年	松平乗紀	長野県小諸市	小諸城	恵那市	岩村城
10114	城内八幡宮 (義勝寺)	1702年	松平乗紀	長野県小諸市	小諸城	恵那市	岩村城
01414	全久院	1711年	松平光熙	岐阜市	加納城	京都府京都市	淀城
01415	妙光寺	1711年	松平光熙	岐阜市	加納城	京都府京都市	淀城
01418	良善寺	1711年	安藤信友	群馬県高崎市	高崎城	岐阜市	加納城
02203	正林寺	1728年	高木貞輝	大垣市（上石津）	—	大垣市（上石津）	—

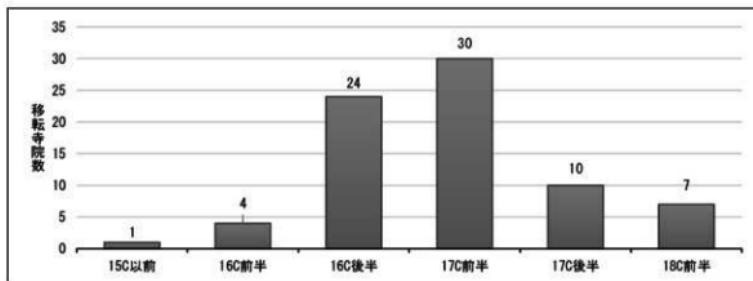
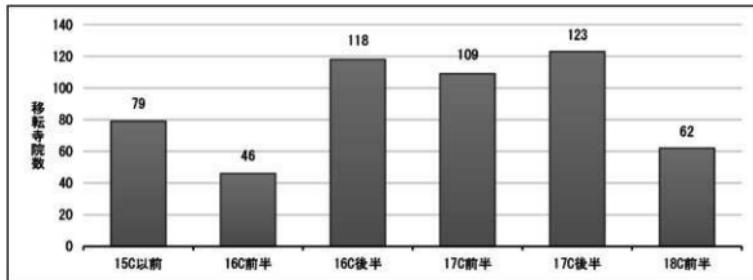


図1 時期別の大名主導による移転寺院数の変化



次に「移転を主導した大名」を確認する。16世紀前半までは、2ヶ寺以上の寺院を移転させている大名を確認することはできない。16世紀後半になると、織田信長が岐阜城の周辺への寺院の移転を大規模に行っている。また16世紀末には、豊臣家に従った大名（稻葉貞通、金森長近、羽柴秀勝、織田秀信、石川忠総、森忠政等）が寺院を移転させている。17世紀以降は、一人の大名が複数の寺院を移転させるケースが増える。松平家乗、加藤貞泰、徳川家康、岡部長盛、戸田氏鉄、戸田氏信、丹羽氏音、松平乗紀、松平光熙等である。大名による寺院の移転と城との関わりについて確認できる一番古い事例は、16世紀前半の斎藤道三が稲葉山城の近くへ移転した美江寺（岐阜市）である。16世紀後半になると稲葉山城を改修し岐阜城へと作り替えた織田信長が積極的に城下への移転を行わせている。それ以降に寺院移転を主導している大名のほとんどが、寺院を城内や城下町への移転させていることを確認できる。

「移転前の場所」と「移転後の場所」の関係については、17世紀の初めぐらいまで城とは関係のない場所から移転させている場合が多いが、17世紀半ばごろからは他の地域の城や城下町にあった寺院が、別の城や城下町へ移転させられているケースが増えてくる。これは戸田氏鉄が尼崎城から大垣城へ移転させている文殊寺、圓通寺、常楽寺、全昌寺、常隆寺、南光院、瀬勒寺、松平乗紀が小諸城から岩村城へ移転させている乗政寺、城内八幡宮（薬師寺）等が挙げられる。また、17世紀半ばごろから、同じ城下の中で何度も移転を繰り返させている場合もあり、特に大垣城下の寺院で多く確認できる。例えば、善教寺は天正17（1589）年に羽柴秀勝により羽栗郡竹ヶ鼻から城下の本町へ移され、寛永5（1628）年に岡部長盛により城下の竹島町に移され、明暦元（1655）年に戸田氏信により城下の寺内町に移されている。これ以外にも淨専寺や常楽寺、瀬勒寺等が大垣城下の中で移転を繰り返している。

これら「移転時期」「移転を主導した大名」「移転の場所」の状況を集約した結果から推測されるることは、近世城下町の整備と大名による寺院移転がリンクするということである。岐阜において近世城下町の整備は、16世紀後半の織田信長岐阜城下町に始まり⁸⁾、16世紀末以降に飛騨国・高岡城や美濃国の大垣城等各地で行われるようになっていく⁹⁾。それに合わせて大名主導の城下への寺院移転は増えていく。17世紀後半以降に大名主導の寺院移転が減ってくるのは、城下町の整備がほぼ完了したことによるものだと考えることができる。

表1を作成する過程で、寺院の移転に関して次のようなことも確認できた。大名が移転した場合におけるその城下の寺院の動態に注目すると3つのケース（I～III類）に分類することが可能である。I類は大名が寺院を城下に移転させた後、その大名が他の城へ移った場合に寺院は移転しない場合である。このケースにあてはまるのは、織田信長の岐阜城下（岐阜市）の寺院、加藤貞泰の黒野城下（岐阜市）の寺院である。織田信長は永禄10（1567）年に尾張国（愛知県）小牧から美濃国（岐阜県）岐阜城（当初は稲葉山城）へと居城を移し、多くの寺院移転に関わっている。その後、永禄10（1567）年に近江国（滋賀県）安土城に居城を移しているが、岐阜城下の寺院が安土城下へ移されたという記録は確認できない。加藤貞泰は文禄3（1594）年に黒野城を築城し、城下に複数の寺院を移転させた。その後、慶長15（1610）年に伯耆国（鳥取県）米子へ転封となるが、黒野城下の寺院を米子へ移転させていない。II類は、大名が寺院を城下に移転させるが、その大名が他の城へ移った場合に寺院も一緒に移転している場合がある。このケースにあてはまるのは、森氏の美濃金山城下（可児市）の寺院

や松平氏の加納城下（岐阜市）の寺院である。妙願寺（可児市）は、森可成が美濃金山城主になった時に建立された寺院である。息子の森忠政の時に信濃国（長野県）川中島、美作国（岡山県）津山へと転封を繰り返すが、妙願寺も大名と共に移転を繰り返した。全久院（岐阜市）は永正11（1514）年に三河（愛知県）で建立された寺院であるが、寛永16（1639）年に松平光重が岐阜市加納へ転封すると、全久院も加納に移転させられた。さらに正徳元（1711）年に松平光熙が山城（京都府）に転封となると、全久院も山城へ移転させられた。Ⅲ類は、大名が寺院を城下に移転させるが、その城主が他の城へ移った場合に寺院も一緒に移転させられ、かつ元々の城下にも同じ名前の寺院が残る場合である。これにあてはまるのは、岩村城下（恵那市）の盛巖寺（恵那市）がある。盛巖寺は松平家乗によって上州那波（群馬県）にて建立された寺院で、1601年に松平家乗が美濃国岩村に転封されると、盛巖寺も岩村城下に移転させられ、その後寛永15（1638）年に松平乗寿が遠江国（静岡県）浜松に転封されると、盛巖寺も浜松に移転させられた。しかし、恵那市にも盛巖寺は残され現在まで続いている。Ⅰ類は16世紀後半から17世紀初めに多く確認できる。Ⅱ類は17世紀以降に出現してくる。Ⅲ類は事例が少ないので傾向を掴むのは難しい。

I類からII類への変化は、城下町の整備との関係に加えて大名と寺院との結びつきが17世紀以降にかなり強まっていたのではないかと推測できるが、具体的な変化の理由は不明である。

（2）大名による寺院移転の分布

ここまで分析により、大名による寺院の移転は城や城下町の整備との関係で行われる場合が多いことが判明した。そこで岐阜県内で寺院の移転（＝城下町の整備）が行われた場所を図3・4に図示した¹⁰⁾。

図3を見ると岐阜県南部の木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）流域の城で大名による寺院移転の記録が多く確認できるが、東濃ではほとんど確認することができない。図3は16世紀全体で括っているがもう少し細かい時期で考察すると、16世紀後半に岐阜城を中心に多く見られるようになり、16世紀末に大垣城や郡上八幡城、高山城等の城下で寺院の移転が行われるようになる。これは先述のとおり織田信長が先陣を切って城下の整備をはじめ、その後確立する織豊政権の影響が美濃国、飛騨国全体に広がっていったことによると考えられる。すなわち織豊政権配下の大名たちによって城下町の整備がなされるようになり、寺院もその影響で移転させられることになったということではないだろうか。なお、美濃国の中でも東濃は織田氏と武田氏の争いが天正10年（1582）年まで続き、その年に起こった本能寺の変等により支配が落ち着かなかったため、城下町の整備が遅れたのではないだろうか。

図4を見ると、17世紀以降も美濃国、特に木曾三川流域では引き続き寺院の移転が積極的に行われ、東濃でも確認することができるようになる。特に大垣城では16世紀以上に多くの移転が確認できる。また、黒野城や加納城、岩村城等でも複数の寺院移転を確認できる。一方飛騨国では、この時期の移転は確認できなくなる。これは、美濃国が慶長5（1600）年の関ヶ原合戦後に徳川氏によって頻繁に大名の転封が行われるようになった一方で（表2）¹¹⁾、飛騨国では豊臣政権から徳川政権に移行しても引き続き金森氏が支配を任せられていたため、城下町の整備も一段落し、寺院の移転も少なくなったことを示していると考えられる。

一つ分からるのが苗木城（中津川市）での移転が確認できることである。苗木城は遠山氏の支

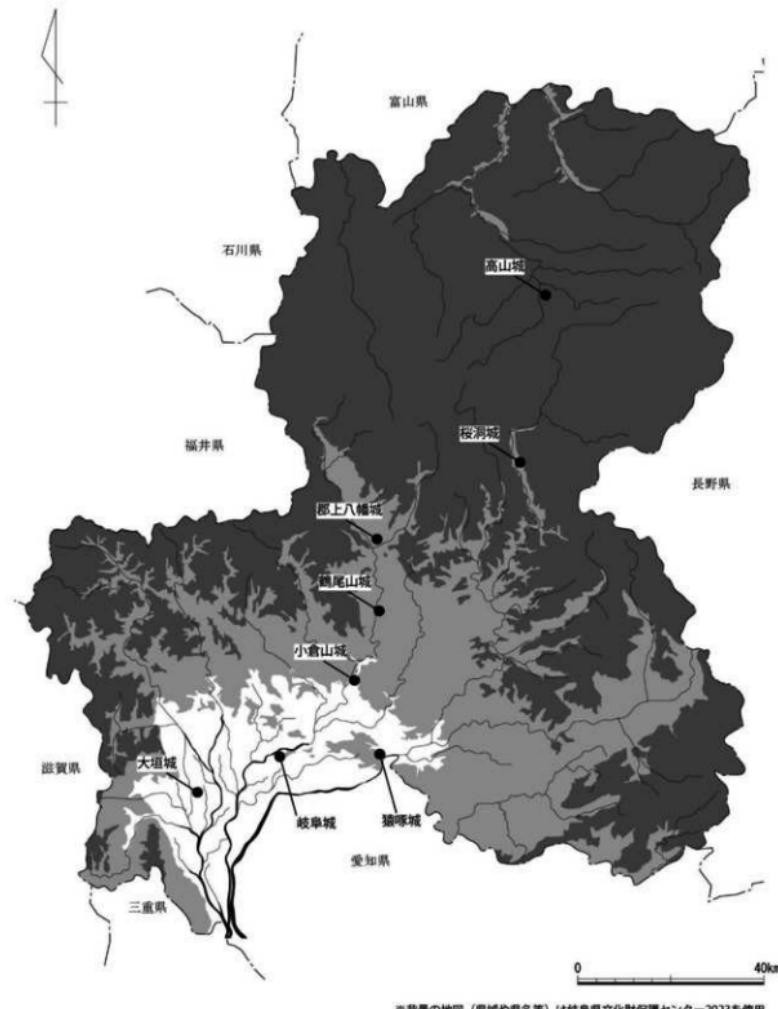
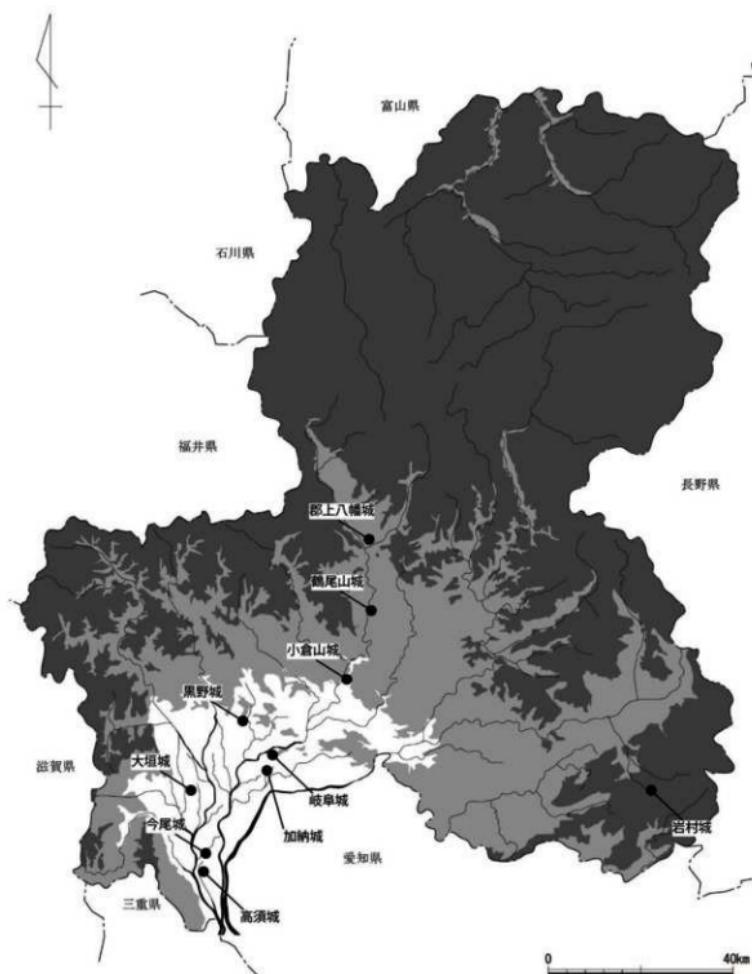


図3 16世紀に大名による寺院の移転があった城



*背景の地図（県域や県名等）は岐阜県文化財保護センター2023を使用

図4 17～18世紀に大名による寺院の移転があった城

表2 美濃・飛騨の大名変遷

	1600年		1700年		1800年	1869年
美濃	大垣藩	石川氏 松井氏	戸田氏			
	加納藩	奥平氏	戸田氏	安藤氏	永井氏	
	高富藩	※高富藩は1705年に立藩			本庄氏	
	高須藩	徳永氏	小笠原氏	松平氏		
	郡上藩	遠藤氏		金森氏	青山氏	
	岩村藩	松平氏	丹羽氏	松平氏		
	苗木藩	遠山氏				
飛騨	高山藩	金森氏		幕府直轄領		

※岐阜県 2001を加工

配の元で城山の北麓に城下町が存在していたことが分かっている¹²⁾。また、苗木藩初代藩主の遠山友政は慶長19(1614)年に雲林寺を建立し仏教統制を行っている。にもかかわらず遠山氏による寺院移転の記録は確認できない。理由として、明治3(1870)年から4(1871)年にかけて行われた廃仏毀釈¹³⁾によって、そういった伝承や記録が残らなかつた可能性もあるが詳細は不明である。

2 寺院を移転した理由

(1) 先行研究

ここまで大名による寺院の移転が築城や城下町整備の中で行われてきたことを明らかにしてきた。では大名たちはどのような理由で寺院を城下町の中へ取り込み配置していくのだろうか。その理由を探るため、先行研究や他地域の研究を参考にそれが岐阜県内の事例でも当てはまるのか、また岐阜県独自の特徴があるのか考察する。

まず参考にしたいのは伊藤毅氏の研究である¹⁴⁾。伊藤氏は豊臣秀吉が京都の都市改造計画の中で、寺院を移転させ、寺町を形成させることによって中世的な寺院を近世の教団組織へと変化させていったと分析している。豊臣秀吉は天正14(1586)年に聚楽第の建設を開始し、その過程で大規模な寺院の移転を行わせている。伊藤氏はその目的として次の4つを挙げている。一つ目は防衛線の形成である。都で戦争が勃発した時に、敵が最初に僧侶や寺院に遭遇するように仕向けた。二つ目は町と寺院の分離である。僧侶たちは市内の街とあまりにも親密なので、その親密さを不快に思い人々に悪影響があるとえた。寺院と町の結びつきを分断しようとしたのである。三つ目は下京の再開発である。市内に大規模な敷地を占拠していた寺院の存在は新しい町割りをする上で邪魔だった。そのため、寺院を町外に移して新しい町割りを施行していくのである。四つ目は御土居の建設である。御土居とは洛中のまわりを取り囲む土塁のことである。御土居の東辺は鶴川に接する。河原の工事が難航すると考えた秀吉は、寺院建設のための敷地造成や土木工事を河原まで行い、御土居建設の下準備の一役を任せたのである。伊藤氏は、このような寺町計画の中で、寺院が持っていた様々な既得権益¹⁵⁾

を取り去って機能分離された純粋な寺院を集合させていったのだとしている。

次に参考にしたいのは関戸明子氏・奥土居尚氏の研究¹⁶⁾である。両氏は「高崎城下町の形成過程と地域構成」の中で、高崎城下町における寺院の移転とその配置について考察している。高崎城の城下町は、慶長3（1598）年に井伊直政が箕輪から移転して城下町の造営に着手して以降、多くの大名が転封を繰り返す中で発達していった。井伊氏は高崎へ移転すると、以前に高崎を支配していた和田氏の時代からあった寺院を城郭外に分散し、箕輪から14寺院を移転させている。その中でかつての箕輪城主である長野氏が城の鬼門除け¹⁷⁾として建立した石上寺を高崎城の鬼門にあたる北東の地へ移転させ、代々の城主の祈願所としている。また、その他の大寺院を城下の外縁部、街道の出入口など軍事上の重要な場所に計画的に配置している。箕輪で井伊氏の菩提寺であった安国寺は大手門を正面から守る位置に置かれている。さらに、寺院は領主や家臣、領民の精神的紐帯、武士の集結地、火除け地、町人の避難地などの機能を担うことになった。このように、高崎城下町でも大名の都市計画にあわせて寺院を移転させ、様々な機能を担わせていたと説明されている。

（2）県内寺院の移転理由

では、これらの研究で示されているような寺院移転の理由が県内の寺院に当てはまるのだろうか。それを明らかにするため、寺院移転の理由や寺院の役割が由緒から読み取れる寺院を抽出し、まとめたのが表3である¹⁸⁾。それらを豊臣秀吉の京都整備や高崎城下の整備と比較すると多くの共通点を見つけることができた。それらは次のように分類することができる。A類：戦時の防衛拠点として役割、B類：鬼門除け（仏教の靈的な力によって城や城下町、一族を守る）、C類：都市を統治していくうえで必要な様々な任務の遂行、D類：大名にとって脅威となるような寺院と民衆との関係を分断すること（寺院勢力の抑圧）、E類：新しい都市整備に必要な土地の確保、である。A類～C類とD類・E類では内容が異なり、前者は大名が寺院を城下に配置する理由、後者は寺院を立ち退かせる理由である。では、岐阜県内における具体的な事例を挙げる。

A類については岐阜城下の誓願寺の由緒に次のような記述がある。

「永禄12（1569）年織田信長は尾張の清州にあった当地五世岩空上人に帰依し、岐阜に移した。それは現在地ではなく、当時の今泉町（現在の常磐町、上竹屋町、泉町付近）に数町歩の土地を与え、長良川から用水路を造って水を引き、堀をめぐらして門中に数棟の堂宇を建立し、外敵に備える出城の形の大寺院を造った。」¹⁹⁾

織田信長が出城として大寺院を利用するため、寺院を移転させたという記述である。岐阜県内の寺院の由緒で寺院を城の防衛拠点にするという手法が確認できるのはこの事例だけであるが、同様の機能を求めていると考えられる寺院としては、美濃金山城下の可成寺旧境内がある。可成寺は大堀切の南東側にあったという伝承地があり²⁰⁾、現地には平坦面が残っており、城との位置関係から、これも曲輪としての機能をもっていた可能性がある。

B類については、小倉山城下の来昌寺の由緒に次のような記述がある。

「慶長年間金森長近の新城下町造りの際、鬼門除として現在地に移され、清光山淨円寺と称した。」²¹⁾

まさに「鬼門除け」のために移転された寺院であったことがわかる。ただ、鬼門除けについては移転ではなく城下に新しく建立されることの方が多い。具体的に例を挙げると美濃金山城下の神照寺、黒野城下の薬師寺、猿啄城下の學専寺等である。城や城下町整備の中で、移転させる寺院と建立する

表3 大名による移転の意図がわかる寺院

報告書の寺院番号	寺院名	移動時期	移転した大名	移転先に開達する城郭	由緒に残る移転の理由、目的 (A~Eは分類、文中参照)
01003	美江寺	1532年 ～1555年頃	斎藤道三	稲葉山城	稲葉山城を築いた際、現地に移転し、城下の繁栄を守護させた。(B)
01055	蟹願寺	1567年	織田信長	岐阜城	堀をめぐらして門中に数棟の堂宇を建立し、出城形の大寺院であった。(A)
01058	安楽寺	1576年頃か	織田信忠	岐阜城	戦乱の中で志半ばで戦死した者たちを弔うのにふさわしい地として淨土宗寺院を岐阜善光寺の門前に集めた。(B)
01141	専長寺	1610年	加藤貞泰	黒野城	城下町の繁昌のため移転を請われ、黒野別院南に移転。(C)
01372	正木御坊	1610年	加藤貞泰	黒野城	大洪水により正木別院が水害を受けたことが原因の一つとも云われ、黒野城下繁栄のためともいわれる。(C)
01413	西野不動堂	1567年頃か	織田信長	岐阜城	岐阜町を守るために、城下町四方に伊奈波善光寺、小熊の地蔵、西野の不動、美江寺の親翁を四天王とした。(B)
02095	善念寺	1563年	氏家卜全	大垣城	郭内の要地であるとされ、寺の場所を召し上げられ、竹島町西端へ移転した。(E)
02201	善教寺	1628年	岡部長盛	大垣城	用地として寺地を召上げられ、竹島町に移り本堂を造営する。(E)
07008	来昌寺	1596年 ～1615年	金森長近	小倉山城	町づくりの際に、鬼門除けとして現在地へ移され、本堂に数多の鬼の瓦が使用される。(B)
10100	赤薬師	1686年	丹羽氏音	岩村城	城下町乃び城の守護の意味があり、明治維新まで存続。(B)
19036	安養寺	1588年	稲葉貞通	郡上八幡城	大島安養寺の勢力が強大なのを憂慮して、寺を城下に近い小駄良に移させた。(D)

寺院の使い分けがあった可能性がある。また岐阜城下の安樂寺の沿革に次のような記述がある。

「織田忠公が戦乱の中で志半ばで戦死した者たちを弔うのにふさわしい地として淨土宗寺院を岐阜善光寺の門前に集めた。伊奈波神八ヶ寺の一つである。」²²⁾

この善光寺門前に集められた寺院について、篠田氏は「因幡神社の社頭に愛宕社や善光寺を勧請し、因幡山を天下人の居城とするに相応しい、鎮護の靈城を創出しようとした。」²³⁾と述べている。これは鬼門除けとは違うが、仏教の靈的な力によって城や城下町を守護するという意味ではBに分類できるのではないだろうか。

C類については、岐阜市黒野城下の寺院がある。黒野城下の正木御坊、専長寺は「城下繁昌」のために加藤貞泰によって移転させたとされている²⁴⁾。加藤貞泰は城下町で楽市政策に尽力した人物なので、寺院を城下町に取り込むことによってそこに人々が集まり、経済の発展につなげようとしたと推測する。ただし、C類について、高崎城下では火除け地や避難場所のような様々な機能を担わせているとしているが、岐阜県内の寺院の由緒からはこのような内容を確認することはできなかった。

D類については、郡上市安養寺がある。安養寺が郡上八幡城下へ移転した経緯については白鳥町史で次のように説明されている。

「安養寺はこのように強大な勢力をもっていたので、東氏も遠藤氏も心を遣い、婚姻関係を結んで

親しく交っていた。稻葉貞通が封を本郡に受けると、深く安養寺の威勢をはばかって、城を鎮護するとの名目で、寺を八幡城下へ移そうとした。²⁵⁾

安養寺は浄土真宗の寺院で、信徒への影響力が強いだけでなく、甲斐の武田氏や越前の朝倉氏など群雄の間に立って奔走していた。そのため稻葉貞通は安養寺が領国支配の中で脅威であると考え、自分の支配下に置こうとしていたことが推測される。豊臣秀吉が京都において町と寺院の関係を断つために郊外へと移転した事例とは逆のようにも見えるが、寺院勢力の抑圧という意味では同類ではないかと考えた。

E類については、大垣城下の善念寺がある。同寺院の由緒に次のような記述がある。

「永禄6（1563）年に氏家卜全入城の際、郭内要地たるに依り、寺地を召上げられ、竹島町西端へ移転」²⁶⁾

また、同じく大垣城下の善教寺の由緒にも次のような記述がある。

「寛永5（1628）年城主岡部内膳正より用地として寺地召上げられ、5世光月院善教竹嶋町へ移り本堂を造営す。」²⁷⁾

これらは、大名が築城や城の改修、城下町の整備をしていく中で、寺院の敷地を取り上げ、代わりに他の土地を与えて移転させるという事例と考えられる。豊臣秀吉が敷地の確保のため寺院を移転させたのと同様に、また、井伊直政が和田氏の時代からあった寺院を城外に分散させたのと同様に大名にとって邪魔な寺院は別の場所に移転させられていったと推定される。

このように、大名たちは城及び城下町の整備の都合に合わせて寺院を移転させていたことが分かる。そして、これは中世の大名と寺院との関係は違って、近世の大名が寺院を支配下に置けるようになったことを示していると思われる。

（3）移転と宗派の関係

大名による寺院の移転について、宗派によってその扱いは違うのだろうか。先述の伊藤氏の研究によると、秀吉による京都都市改造計画における移転ではすべての寺院で行われたわけではなく、ほとんどは浄土宗、日蓮宗、時宗の寺院であったとされる²⁸⁾。岐阜県内の寺院移転においても、宗派を意識して大名が寺院を移転させていることへの指摘はいくつかある。県内寺院の移転理由でも述べた善光寺門前の寺院について、篠田氏は浄土宗の寺院を集めていることを指摘している。また、由浅耕三氏の研究²⁹⁾によると、大垣城下では本道沿いを中心とする部分に「真宗」が多く、侍屋敷の近くに「浄土宗」、城下町周辺部に「臨済宗」「曹洞宗」、町屋敷の周辺部に「日蓮宗」が多いといった指摘をされている。そこで表1で取り上げた寺院についてその宗派を確認してみると真宗や浄土宗が多いことがわかる（表4）。ただし、これは大名の意図というより岐阜県内において他の宗派に比べて真宗の寺院が多い³⁰⁾ため移転数も真宗が多くなっている可能性がある。また報告書でも指摘しているが、地域によって信仰する宗派は大きく異なる。そのため、県内全ての城で共通するような傾向を見出すことはできない。宗派と寺院移転の関係については、それぞれの城ごとや大名ごとに相關関係を調べる必要があると考えられ、今後の課題としたい。

おわりに

小稿では岐阜県内における大名主導の寺院の移転について、時期や地域、移転を主導した大名、城

表4 大名主導の寺院移転と宗派

報告書の寺院番号	寺院名	宗派	移転を主導した大名	移転前に関連する城郭	移転先に関連する城郭
01003	美江寺	天台宗	寄藤道三	一	稻葉山城
01252	大宝寺	臨濟宗	寄藤義龍	一	稻葉山城
01055	賢願寺	淨土宗	織田信長	清州城か 岐阜城	一
01056	極楽寺	淨土宗	織田秀信	一	岐阜城
01057	大泉寺	淨土宗	織田信長	一	岐阜城
01058	安樂寺	淨土宗	織田信忠	一	岐阜城
01060	含玄寺	淨土宗	織田信忠	一	岐阜城
01061	賢安寺	淨土宗	織田信長	清州城か 岐阜城	一
01108	乗生寺	真宗	織田信長	一	岐阜城
01118	円徳寺	真宗	織田信長	一	岐阜城
01272	勝林寺	曹洞宗	織田信長	一	岐阜城
01308	法華寺	日蓮宗	織田信長	一	岐阜城
01250	護国寺	臨濟宗	佛田家康	一	岐阜城
01413	西野不動堂	一	織田信長	一	岐阜城
01418	良善寺	淨土宗	安藤信友	高崎城	加納城
01416	彌勒院	真言宗	松平光重	一	加納城
01414	全久院	曹洞宗	松平光重	一	加納城
01411	専長寺	真宗	加藤自恭	一	黒野城
01372	正木御坊	真宗	加藤貞泰	一	黒野城
10005	淨光寺	真宗	松平家業	那波城か 岩村城	一
10034	空藏寺	曹洞宗	松平家業	那波城か 岩村城	一
10050	妙仙寺	曹洞宗	丹羽氏信	岩崎城	岩村城
10050	栗政寺	一	松平秉記	小諸城	岩村城
10100	赤堀筋	一	丹羽氏音	一	岩村城
10114	境内人幡宮 (愛姫)	一	松平秉記	小諸城	岩村城
02018	圓通寺	淨土宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
02034	常楽寺	淨土宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
02010	文殊寺	真言宗	戸田氏鉄	大垣城	大垣城
02260	源聖院	真言宗	氏家直元	一	大垣城
02263	南光院	真言宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
02264	彌勒寺	真言宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
02264	般若院彌勒寺	真言宗	戸田氏直	大垣城	大垣城
02062	淨專寺	真宗	石川忠應	大垣城	大垣城
02095	圓念寺	真宗	岡部長盛	大垣城	大垣城
02201	善教寺	真宗	戸田氏信	大垣城	大垣城
02231	金昌寺	曹洞宗	戸田氏信	大垣城	大垣城
02240	常隆寺	日蓮宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
07008	来昌寺	淨土宗	金森長近	一	小倉山城
07018	清泰寺	臨濟宗	金森長近	丹波山城	小倉山城
19036	安泰寺	真宗	稲葉直通	郡上八幡城	一
19091	龍風寺	臨濟宗	清藤勝隆	郡上八幡城	一
21082	慈眼寺	淨土宗	池永昌重	一	高麗城
03035	圓滿寺	真宗	金森長近	一	高山城
09088	真福寺	真言宗	佛田家康	一	名古屋城
10034	空藏寺	曹洞宗	松平家寿	岩村城	雨松城
01414	全久院	曹洞宗	松平光熙	加納城	淀城
01415	妙光寺	日蓮宗	松平光熙	加納城	淀城
34001	覺専寺	真宗	豊臣秀吉	猪塚城	猪塚城
14065	妙顯寺	一	森忠政	美濃金山城	高津城
10050	妙仙寺	一	丹羽氏音	対村城	高津陣屋
21021	常安寺	日蓮宗	今尾城主	一	今尾城
20030	龍泉寺	臨濟宗	三木良輔	一	桜洞城
19093	林慶院	曹洞宗	涼薄敦教	一	鶴尾山城

郭との関連性について考察した。時期については 16世紀後半から大名主導の寺院移転が増え、17世紀前半にピークを向かえ、17世紀後半以降には減少していくことがわかった。地城については、16世紀に美濃国の木曾三川流域や飛騨国で確認できるが、17世紀以降は飛騨国ではほとんど確認できなくなるのにに対し、美濃国では増加していく。移転を主導した人物については、16世紀後半に織田信長が多くの寺院を移転させ、16世紀末には豊臣配下の大名が寺院移転に関わるようになる。17世紀になると江戸幕府の政策によって転封された大名たちによって寺院移転が行われるようになる。これらの移転は斎藤道三・織田信長以降、ほとんどの場合において城との関わりを示す記述が確認できる。すなわち、大名による寺院の移転は城や城下町の整備との関係を示している。そこで、残っている由緒をさらに考察し、大名が寺院の移転を行いうときの特徴や移転を行った理由について探った。そこで由緒等の資料から読み取れたことは、大名たちが寺院に対して防衛機能、城や城下町の守護、城下町経営における世俗的な役割などを求めていたということである。一方で、寺院が民衆と強い繋がりをもつことを忌避し、都市計画に邪魔な寺院はその敷地を取り上げるといった行動も行っている。

これらのこと踏まえると、大名は 16世紀から 17世紀にかけての政治状況の変化にあわせて寺院に対する支配力を強めていったことが推測される。15世紀以前の寺院は政治権力の影響を受けつつも独立した存在であり、地域の民衆に対しても領主的な立場にあった³¹⁾。それが、

戦乱で荒廃したり、太閤検地などの政策によって中世的な支配体制が崩壊したりする中で、その独自性を喪失し、寺院は大名の統制下に入り、大名に命令されるままに移転を繰り返していくことになったのではないだろうか。

ただし今回的小稿では、今後の寺院と大名、寺院と城との関係について考えなければならない課題を多くあることを示したと言える。例えば、城主の移転と寺院の移転の関係について、大名が移転する場合に城下に残る場合と大名と共に移転する場合があるが、この違いにはどのような意味があるのか、大名にとって城下町の整備の中で様々な機能、役割を寺院に求め寺院配置をしていることはある程度見えてきたが、どのような機能の時に城下町のどの位置に寺院を置いているのか、といった課題が見えてくる。宗派と寺院移転、寺院配置の関係についても検討が必要である。

このような課題を解決していくためには、研究の方法についても見直さなければならない。小稿では自治体史に記述された寺院の由緒をメインの資料として論を展開しており、本来は一次史料に週ってデータを収集するべきであった。そのことにより大名の主導によって移転させられた寺院を網羅することは、おそらくできていない。また、寺院が移転された場所や位置については考古学的な検証³²⁾や絵図等を用いた歴史地理学的な視点³³⁾による分析もできなかった。そのためには、個別の城、城下町ごとに詳しく丁寧に資料を收集し考察する必要がある。個別の地域で検証することができれば、宗派と移転の関係等ももっと明らかになってくるだろう。さらに、今回は大名による寺院の移転という視点から城との関係等を見てきたが、大名による寺院の建立という視点も重要である。城や城下町の整備の中で、大名によって新しく建立された寺院も多くある。移転された寺院と建立された寺院との間にはどのような違いがあるのか、その検証も必要である。城や城下町の整備以前から存在しながら、移転していない寺院についても調べることができない。寺院の移転を行っていない大名も存在するわけだが、これについてもデータの集約はできていない³⁴⁾。これらの多くの視点から見直すことによって中世から近世に移り変わる時代の中で寺院がどのように変化していったのか、違った姿が見えてくるのではないかと考えている。

注

1) 文化財保護センター2023 第6分冊 p.86

2) 篠田 2015p.21-45

3) 国史大辞典（吉川弘文館 1993）によると、大名とは古くは名田を持った者をさし、鎌倉時代には有力な武士をあらわす言葉になった。その後も様々な意味で使われるが明確な定義はない。小稿では大きな所領をもって家臣団を形成した有力武士の事をさす。

4) 内服 2021 や篠田 2015 でも由緒を根拠とした研究を展開している。

5) 文化財保護センター2023 第6分冊 p.72

6) 寺院を移転時期の順に並べてるので複数移転している寺院については、複数回表に出てくる。移転前の場所及び移転先の場所については現在の市町村名（岐阜県外の場合は都道府県名を含む）になっている。関連する城については「○○によって移転、○○城築城時に移転、○○から寺領を拝領」等の表現が由緒に含まれるものを探出した。また、「高山市照蓮寺と一緒に移転」というように間接的に大名による移転が読み取れる寺院も対象に含めた。

7) 図1は複数回移転している場合、それぞれカウントしているのに対し、図2は総合調査報告書第6分冊 p.90「表19 時期別の成立等」を参考に作成しており、複数回移転している場合は、最初の移転のみカウントしている。比較には注意が必要で

- あるが、その誤差を踏まえても移転のピークが違うということは明らかである。
- 8) 岐阜県 2001 p 236~237
 - 9) 岐阜県 2001 p 270~271, 276~277
 - 10) 図3・4の背景の地図(県域や県名等)は岐阜県文化財保護センター2023第6分冊p 92~p 94の図41~図43を使用した。
 - 11) 表2は岐阜県 2001「わかりやすい岐阜県史」p 249の「国内藩・幕府領の変遷」を参考に作成
 - 12) 楠口好古 1989『濃州徇行記』p 147に苗木城の城下町についての記述がある。
 - 13) 中津川市 1988 中巻 2-2 p1717
 - 14) 伊藤 2003 p 29~46
 - 15) 伊藤氏は豊臣秀吉の拡地政策等により中世の寺院がもっていた絶断権や下地進止権などに代表される領主権が否定されたとしている。
 - 16) 関戸明子・奥土居尚 1996 p1~20
 - 17) 鬼門とは陰陽道で長すなわち東北の隅に当たる方角を言い、諸事について忌むべき方角とされている。そのためわが国では古来鬼門除けとして神仏を祀ることが広く行われてきた。
 - 18) 寺院建立の目的として由緒に書かれている内容としては、菩提を弔うためという記述が最も多い。これは中世以降の寺院において大名による移転や城下町の整備とは関係なく存在する。もちろん時期や地域によって様相の違いはあると考えられるが、これは別稿が必要と考え今回は考察の対象から外した。
 - 19) 特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館 2009p144
 - 20) 文化財保護センター2023 第3分冊 p 86
 - 21) 美濃市 1980p230
 - 22) 特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館 2009p142
 - 23) 篠田 2015p25
 - 24) 黒野史誌編集委員会 1987p1293~1294
 - 25) 白島町教育委員会 1976p224
 - 26) 大垣市 1930p180
 - 27) 大垣市 1930p202~203
 - 28) 伊藤 2003 p 33
 - 29) 由浅 1999p118
 - 30) 岐阜県史(岐阜県 1972 p 939)「第203表 近世美濃国の宗派別および郡別寺院数」によると、禅宗 787 寺、浄土宗 117 寺、真宗 907 寺、時宗 3 寺、日蓮宗 39 寺、天台宗 38 寺、真言宗 76 寺で真宗が一番多い。また飛騨国に関しては具体的な寺院数を把握できていないが、わかりやすい岐阜県史(岐阜県 2001 p 350)に「西濃・郡上・飛騨の真宗、中濃・東濃の禅宗」とあるように、真宗が多いことが指摘されている。
 - 31) 中世の佛教教団は単なる宗教集団ではなく、強大な政治勢力でもあった。それが織田信長による比叡山の焼き打ち、石山戦争、一向一揆制圧など、中世の佛教教団解体を経て、豊臣秀吉による比叡山の復興、本願寺との協調、方広寺・大仏殿建立などが行われ、佛教教団の再編成が進められた。中世の佛教教団の解体と再編成が織豊政権によって行われたことにより、江戸時代の寺院統制の前提条件が整えられた。(末木 2010p284)
 - 32) 例えば内堀氏は大垣城下の遮那院と徳秀寺について、発掘調査の結果から16世紀後葉に遮那院が移転し、その跡地に徳秀寺が建設され、17世紀初頭に徳秀寺が移転し、曲輪の再整備がなされたのではないかと推測されている。こういった検証が他の寺院についても必要である。(内堀 2021p158~159)

33) 例えば関戸明子・奥土居尚 1996 では絵図を用いた考察を行っている。

34) 寺院の移転を行っていない大名の代表例としては土岐氏が挙げられる。例えば内藤氏は「守護に間連する寺院は守護所の移転に伴って移転しない。寺院を伴って移転するのではなく、すでに寺院の存在する場所に居館と周辺の屋敷地が新設される」と指摘されている。(内藤 2021 p 105)

参考文献

- 伊藤毅 2003『都市の空間史』吉川弘文館
- 糸貫町 1982『糸貫町史通史編』
- 内藤信雄 2021『戦国美濃の城と都市』高志書院
- 恵那市教育委員会 2013『岩村城跡基礎調査報告書2』
- 大垣市 1930『大垣市史 下巻』
- 大垣市 1968『新修大垣市史 通史編一』
- 太田成和編 1954『加納町史 下巻』
- 太田成和 1987『郡上八幡町史 下巻』
- 可児町 1980『可児町史 通史編』
- 兼山町史編纂委員会 1972『兼山町史』
- 上石津町役場 1979『上石津町史 通史編』
- 上石津町教育委員会 2004『新修 上石津町史』
- 上宝村 2005『上宝村史 下巻』
- 川辺町史編纂室 1996『川辺町史 通史編』
- 岐阜県 1972『岐阜県史 通史編 近世下』
- 岐阜県 2001『わかりやすい岐阜県史』
- 岐阜県岩村町役場 1956『岩村町史 全』
- 岐阜県海津郡南濃町 1982『南濃町史 通史編』
- 岐阜県海津郡平田町役場 1964『平田町史 下巻』
- 岐阜県地方改良協会養老郡支会 1970『養老郡志』、岐阜日日新聞社・県郷土資料刊行会
- 岐阜県文化財保護センター2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査』
- 岐阜市 1980『岐阜市史 通史編 原始・古代・中世』
- 岐阜市 1981『岐阜市史 通史編 近世』
- 黒野史誌編集委員会 1987『岐阜市黒野史誌』
- 桑原町誌編集委員会 1994『桑原町誌』、桑原町誌刊行実行委員会
- 国史大辞典編集委員会 1993『国史大辞典』吉川弘文館
- 坂祝町教育委員会町史編纂事務局 2005『坂祝町史 通史編』
- 市制五十年記念誌編集委員会 2004『羽島市制五十年史』、吉田三郎
- 篠田勝夫 2015『岐阜市金華地区の寺院配置考』『岐阜史学』104
- 清水進 2012『大垣城の歴史』大垣市文化財保護協会
- 白川村教育委員会 2004『白川郷ゆかりの寺院』
- 白鳥町教育委員会 1976『白鳥町史 通史編 上巻』

- 末本文美士 2010 『新アジア仏教史 1 3 日本Ⅲ民衆仏教の定着』校成出版社
- 関戸明子・奥土居尚 1996 「高崎城下町の形成過程と地域構成」『歴史地理学』180
- 高田裕治郎 『現在の大垣市誌』中央新聞社
- 高山市 1953 『高山市史 下巻』
- 特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館 2009 『ふるさと岐阜・魅力発見大作戦 岐阜町金華の誇り』
- 中津川市 1988 『中津川市史中巻II』
- 萩原町史編纂室 2002 『萩原町史第1巻・自然先史中世古代編』
- 樋口好古 1989 『濃州徇行記』大衆書房
- 飛騨市教育委員会 2008 『神岡町史 通史編II』
- 美並村教育委員会 1981 『美並村史 通史編 上巻』
- 美濃市 1979 『美濃市史 通史編 上巻』
- 美濃市 1980 『美濃市史 通史編 下巻』
- 由浅耕三 1999 「大垣の城と城下町施設の配置形態に関する考察」『第17回地域施設計画研究シンポジウム』日本建築学会

岐阜県文化財保護センター

研 究 紀 要

第8号

2024年2月1日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1